令和６年度シンポジウム助成事業

指宿橋牟礼川遺跡
国史跡指定100年記念シンポジウム

日本の歴史を変えた
先史時代のポンペイ

要旨集

2024年
11月24日（日）13:00▼17:00

指宿市民会館 大ホール

主催　指宿市
一般財団法人
自治総合センター

後援　総務省

国指定史跡　指宿橋牟礼川遺跡

上空から見た開聞岳

主催者あいさつ

本年は，大正 13 年 12 月 9 日に指宿橋牟礼川遺跡が国史跡に指定されてから 100 年を迎える節目の年にあたります。

指宿橋牟礼川遺跡は，日本考古学の黎明期であった大正時代，京都帝国大学の濱田耕作博士らによって発掘調査が行われました。

その結果，開聞岳の火山灰層をはさんで下層から縄文土器，上層から弥生土器が出土したことで，縄文時代が弥生時代よりも古いことが，日本で初めて層位学的に証明されたのです。現在，教科書に載っているこの日本史の常識は，指宿橋牟礼川遺跡の発掘調査によって明らかになったと言えるでしょう。

また，濱田耕作博士は，指宿橋牟礼川遺跡の火山災害遺跡としての性格を予見し，本遺跡をイタリアのポンペイ遺跡に喩えて「先史時代のポンペイ」と呼びました。このことから，今回，本シンポジウムのタイトルを「日本の歴史を変えた先史時代のポンペイ」といたしました。

平成 8 年には，市の歴史・文化の情報発信基地として，「指宿市考古博物館　時遊館 COCCO はしむれ」がオープンしました。また，同年，史跡は復元竪穴建物や貝塚などを展示した公園として整備され，以来，指宿市では博物館と一体となった史跡の活用に取り組んで参りました。現在，史跡公園は，歴史の学習の場や市民の憩いの場として多くの方々に親しまれております。

指定から 100 年目となる記念すべき年に開催される本シンポジウムが，指宿橋牟礼川遺跡の歴史的価値について更なる理解を深めるとともに，これからの未来に向けて，防災を含めた火山災害遺跡が果たす役割について考える契機となることを心から祈念いたしまして，あいさつといたします。

令和 6 年 11 月 24 日

指宿市長　打越　あかし

指宿市教育委員会あいさつ

指宿橋牟礼川遺跡は，大正５年，指宿出身で旧制志布志中学校に通っていた学生 折田（旧姓：西牟田）盛健が，橋牟礼川の土手で縄文土器と弥生土器を拾ったことをきっかけに発見されました。国史跡指定から 100 年経った現在では，縄文時代と弥生時代の新旧関係を明らかにした遺跡，そして，国内屈指の火山災害遺跡として評価され，県内外から多くの方々が見学に訪れてくださっております。

指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれでは，令和６年 10 月５日から令和７年３月２日まで開催いたします企画展において，史跡活用の一環として，遺跡から出土した遺物や復元竪穴建物の三次元データを用いた，ＶＲゴーグルを装着しての古代体験や，古代をモチーフにしたものづくり体験を通じて，遺跡や出土した土器などの文化財をより身近に感じていただくための取り組みを試験的に実施しています。

今後は，講師の先生方からいただいた貴重な提言を踏まえ，本物を見て触れる機会の創出と，デジタルの活用といった新たなコンテンツとを組み合わせながら，指宿橋牟礼川遺跡が，市民の皆様からより一層愛されるものとなりますよう，情報発信や史跡の活用に取り組んで参りたいと思います。

そして，これらの取り組みが子どもたちの心を動かすことで，歴史文化に興味を持ち，情熱を注ぐ折田盛健のような人材が誕生することを願ってやみません。

結びに，シンポジウムの開催にあたり，ご多用の中，多大なるご協力をいただいた講師の先生方をはじめ，これまで指宿橋牟礼川遺跡の発掘・保存・整備にあたり，ご指導をいただいた関係者の皆様，そして，本日のシンポジウムにご参加いただいた全ての皆様に心より感謝申し上げ，あいさつといたします。

令和６年 11 月 24 日

指宿市教育委員会　教育長　田之上 典昭

講師紹介

青柳（あおやぎ）　正規（まさのり）先生

多摩美術大学提供

1944 年大連生まれ。東京大学文学部教授，国立西洋美術館館長，独立行政法人国立美術館理事長，文化庁長官，東京オリンピック・パラリンピック文化・教育委員会委員長などを務め，現在，東京大学名誉教授，日本学士院会員，山梨県立美術館館長，学校法人多摩美術大学理事長，奈良県立橿原考古学研究所所長，石川県立美術館館長，公益財団法人せたがや文化財団理事長，公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京機構長ほか。50 年に亘りイタリアの古代ローマの遺跡発掘に携わる。

国内では，地中海学会賞（1978 年），マルコ・ポーロ賞（1991 年），浜田青陵賞（1991 年），毎日出版文化賞（1993 年），紫綬褒章（2006 年），日本放送協会放送文化賞（2011 年），瑞宝重光章（2017 年）などを受賞，文化功労者（2021 年）。海外では，イタリア ボルト・エンペドクレ賞（1984 年），イタリア共和国功績正騎士勲章（2002 年），イタリア Sebetia Ter 国際賞（2008 年），イタリア Torquato Tasso 国際賞（2017 年），イタリア Amedeo Maiuri 国際考古学賞 (2021 年) を受賞。

主な著書に『ローマ帝国』（岩波書店，2004 年），『文化立国論』（筑摩書房，2015 年），『人類文明の黎明と暮れ方』（講談社，2018 年），『皇帝たちの都ローマ』（筑摩書房，2024 年）ほか。

水ノ江（みずのえ）　和同（かずとも）先生

1962 年福岡県生まれ。同志社大学大学院文学研究科博士後期課程に進学後，福岡県教育委員会，九州国立博物館，文化庁記念物課を経て，現在，同志社大学文学部教授，同志社大学文化財保護研究センター長。

2014 年に日本考古学協会奨励賞を受賞。2018 年～縄文時代文化研究会編集員を務める。

主な著書に，『縄文人は海を越えたか？―「文化圏と言葉」の境界を探訪する』（朝日新聞出版，2022 年），『九州縄文文化の研究―九州から見た縄文文化の枠組み―』(株式会社雄山閣，2012 年) ，『縄文時代の考古学』全 12 巻（編集）（同成社，2007 ～ 2010 年），『入門 埋蔵文化財と考古学』（同成社，2020 年），『実践 埋蔵文化財と考古学：発掘調査から考える』（同成社，2022 年）ほか。九州の縄文文化を網羅的に研究し，南島や朝鮮半島との関係からその地域的特性と枠組みをまとめる。また，30 年間にわたる文化財保護行政経験を基に，文化財保護学，博物館学を研究の柱の一つとする。

千葉（ちば）　豊（ゆたか）先生

1960 年愛知県生まれ。静岡大学，岡山大学大学院文学研究科修士課程，京都大学大学院文学研究科博士後期課程に進学後，京都大学文化財総合研究センター助教，准教授を経て，現在，京都大学文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター准教授。
縄文時代文化研究会運営編集委員，史学研究会評議員，茅野市尖石縄文文化賞選考委員等，委員を多数務める。
主な著書・論文に「濱田耕作と考古学研究法」『考古学ジャーナル』795 号（2024 年），『京都盆地の縄文世界・北白川遺跡群』シリーズ「遺跡を学ぶ」86（新泉社，2012 年），『西日本の縄文土器　後期』（編著，真陽社，2010 年），「土器編年の方法―型式学的方法―」『縄文時代の考古学』第 2 巻（同成社，2008 年）ほか。近年では，画像生成ＡＩ（人工知能）やひかり拓本など，新たな方法・視点から縄文土器研究を深化させる。

本田（ほんだ）　道輝（みちてる）先生

1949 年熊本県生まれ。鹿児島大学法文学部卒業後，加世田女子高等学校教員を経て，2015 年まで鹿児島大学法文学部教授。2021 年まで鹿児島県考古学会長を務める。
柊原貝塚保存活用検討委員会委員，鹿児島県世界文化遺産課発掘調査指導委員，志布志城史跡公園整備検討委員会埋蔵文化財専門部会委員，鹿児島大学埋蔵文化財調査センター長，南九州市文化財保護審議会委員などを歴任。現在，鹿児島県文化財保護審議会会長，鹿児島市文化財審議会委員。
主な論文に，「松木薗遺跡出土の土器について」（『鹿児島考古』第 14 号），「松木薗 1 号住居址出土土器とその意義－松木薗式土器の系譜をめぐって－」（『鹿大史学』第 32 号）など。指宿橋牟礼川遺跡をはじめとして，鹿児島県内の著名な遺跡の発掘調査や報告書作成に携わる。先生の薫陶を受けた卒業生の多くは，南九州を中心に埋蔵文化財行政や博物館運営などの分野で活躍。

桒畑（くわはた）　光博（みつひろ）先生

1963 年宮崎県生まれ。鹿児島大学法文学部考古・文化人類学卒業。2011 年九州大学大学院博士後期課程単位取得。2014 年同大学博士（比較社会文化）学位取得。鹿児島県指宿市教育委員会勤務後，宮崎県都城市教育委員会勤務。2023 年同文化財課長退職。
現在，九州大学大学院特別研究者。その他，南九州大学非常勤講師，宮崎市史編さん編集委員会委員考古部会長などを務める。
2017 年第 11 回九州考古学会賞受賞，2018 年第 8 回日本考古学協会大賞受賞，2024 年イギリス国 ベン・カーレン賞受賞（共著論文）
主な著書は，『超巨大噴火が人類に与えた影響』（雄山閣），『火山災害考古学の展開』（雄山閣），『列島の人々は火山災害にどのように向き合ってきたのか』（山川出版社）など。南九州における先史・古代・中世の地域史研究に取り組むとともに，日本列島の火山災害考古学について研究を続けている。

令和６年度シンポジウム助成事業

指宿橋牟礼川遺跡国史跡指定 100 年記念シンポジウム

「日本の歴史を変えた先史時代のポンペイ」

１　日　時　令和６年 11 月 24 日 (日) 13:00 ～ 17:00（11:00 開場）

２　会　場　指宿市民会館大ホール（鹿児島県指宿市東方 9300 番地１）

３　入場料　無料

４　主　催　指宿市　一般財団法人自治総合センター

５　後　援　総務省

６　開催趣旨・目的

大正 13（1924）年に国指定史跡に指定された「指宿橋牟礼川遺跡」は令和６年度に指定から 100 年を迎える。指宿橋牟礼川遺跡の発掘調査は，日本考古学の黎明期において，京都帝国大学の濱田耕作や長谷部言人らによって行われた。この調査によって，火山灰層をはさんで下層から縄文土器，上層からは弥生土器が出土したことで，縄文時代が弥生時代よりも古いことが層位学的に証明された。現在の日本史の常識は指宿橋牟礼川遺跡の発掘調査によって明らかになったことになる。

また，発掘調査の結果，開聞岳の火山灰で埋もれた火山災害遺跡であることも明らかとなり，指宿橋牟礼川遺跡は「先史時代のポンペイ」と呼ばれるようになった。指宿橋牟礼川遺跡は縄文と弥生の新旧課題だけでなく，災害の脅威についても現代社会に発信できる情報を有している点で，現代的視点で見ても重要な遺跡と評価できる。

本シンポジウムでは，指宿橋牟礼川遺跡の発見史から発掘調査に至る過程や遺跡の重要性を県内外に広く周知するとともに，多くの火山に囲まれて生活する私たちの生活にとっても身近な課題である火山災害について考える機会を提供することを目的とする。

【プログラム】

開会挨拶　１３:００～１３:０５　指宿市長　打越 あかし

第一部《講演》

１３:０５～１３:４０　ふたつのポンペイ

青柳 正規 先生（東京大学名誉教授・元 文化庁長官）

１３:４０～１４:１５　指宿橋牟礼川遺跡と国指定史跡

水ノ江 和同 先生（同志社大学　文学部　教授）

１４:１５～１４:５０「日本考古学の父」濱田耕作と縄文土器研究

千葉　豊 先生（京都大学文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター准教授）

（休憩　１０分）

１５：００～１５：３５　鹿児島県考古学研究の歩みと指宿橋牟礼川遺跡
　本田 道輝 先生（鹿児島県文化財保護審議会会長・元鹿児島大学教授）
１５：３５～１６：１０　火山灰考古学と指宿橋牟礼川遺跡
　桒畑 光博 先生（九州大学大学院比較社会文化研究院　特別研究員）
（休憩　１０分）
第二部《パネルディスカッション》　１６：２０～１６：５５
「橋牟礼川遺跡のこれまでの 100 年，これからの 100 年」
閉会挨拶　１６：５５～１７：００　指宿市教育委員会　教育長　田之上　典昭

【国指定 100 年ロゴ】
　中央の「100」は、大正時代の橋牟礼川遺跡の発掘調査で出土した、当時弥生土器と考えられていた成川式土器の幅広突帯文壺（左）と、縄文時代の指宿式土器（右）を組み合わせています。
　さらに、遺跡を代表する遺物である子持勾玉が出土した様子、南国指宿をイメージさせるハイビスカスを組み入れることで、「日本で初めて縄文土器が弥生土器より古いことを層位学的に証明した」指宿橋牟礼川遺跡が、指定 100 年を機に、これからの 100 年に向けて、より一層地域に愛される遺跡になってほしいとの願いを込めて制作しました。

目次

ふたつのポンペイ……9
青柳　正規（東京大学名誉教授）

指宿橋牟礼川遺跡と国指定史跡……13
水ノ江　和同（同志社大学文学部）

「日本考古学の父」濱田耕作と縄文土器研究 ……17
千葉　豊（京都大学文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター）

鹿児島県考古学研究の歩みと指宿橋牟礼川遺跡……23
本田　道輝（鹿児島県文化財保護審議会会長・元鹿児島大学教授）

火山灰考古学と指宿橋牟礼川遺跡……31
桒畑　光博（九州大学大学院比較社会文化研究院）

ふたつのポンペイ

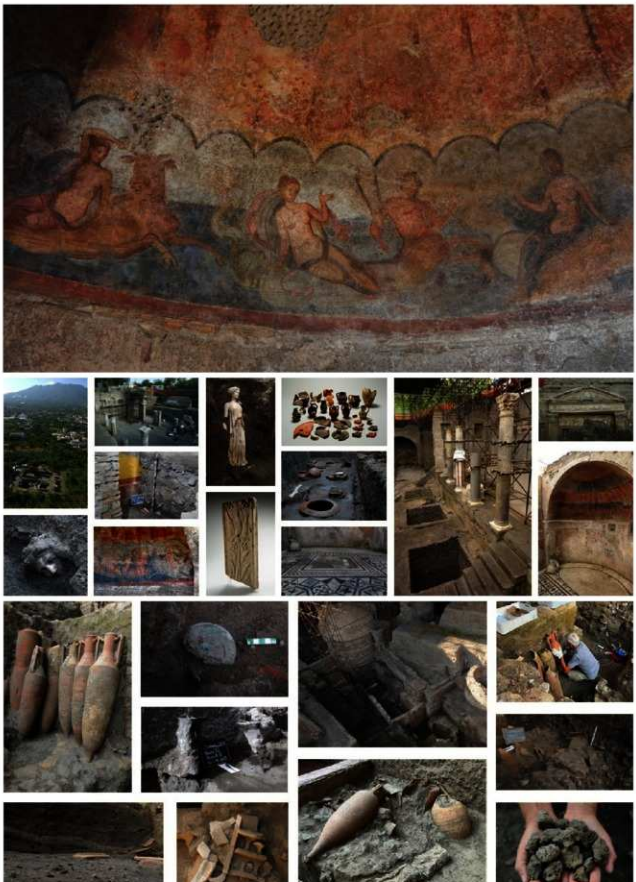
東京大学名誉教授　　青柳　正規

ポンペイ　貝のヴィーナスの家の壁画

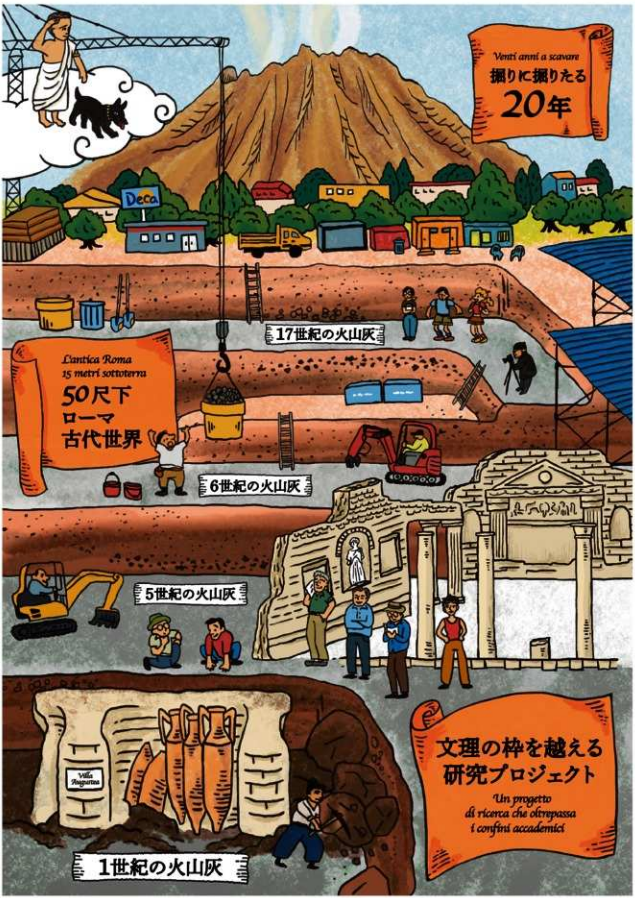
犠牲者の石膏像と出土品

ポンペイから見たヴェスヴィオ火山

ヴェスヴィオ山とナポリ市街地



ソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡の発掘調査と成果（東大 調査団 提供）



20 年続くソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡の発掘調査（画：高井 幸江）

指宿橋牟礼川遺跡と国指定史跡

同志社大学文学部　水ノ江和同

１．史跡「指宿橋牟礼川遺跡」

指宿橋牟礼川遺跡が国の史跡に指定されてから 100 年。国の文化財指定制度が始まったのは 105 年前の大正８（1919）年ですから，指宿橋牟礼川遺跡の史跡指定はその初期段階だったことがわかります。ここでは，「国指定の史跡とは何か？」「指宿橋牟礼川遺跡はどうして国指定史跡になったのか？」「指宿橋牟礼川遺跡の文化財的価値の展開は？」について考えてみます。

２．文化財保護法から考える

史跡指定に限らず文化財の話をするときは，まず文化財保護法の総則（第１・３・４条）を確認しましょう。この総則は，第２条の「文化財の種類」を除いて，1950 年の制定当初からまったく変わっていません。

（この法律の目的）
第１条　この法律は，文化財を**保存**し、且つ、その**活用**を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする。
（政府及び地方公共団体の任務）
第３条　政府及び地方公共団体は、文化財がわが国の歴史、文化等の正しい理解のため欠くことのできないものであり、且つ、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであることを認識し、その保存が適切に行われるように、周到の注意をもつてこの法律の趣旨の徹底に努めなければならない。
（国民、所有者等の心構）
第４条　一般国民は、政府及び地方公共団体がこの法律の目的を達成するために行う措置に誠実に協力しなければならない。
２　文化財の所有者その他の関係者は、文化財が貴重な国民的財産であることを自覚し、これを公共のために大切に保存するとともに、できるだけこれを公開する等その文化的活用に努めなければならない。
３　政府及び地方公共団体は、この法律の執行に当つて関係者の所有権その他の財産権を尊重しなければならない。

３．史跡指定制度の歴史と意義と鹿児島県

史跡の歴史　国による遺跡の史跡指定制度は，大正８（1919）年６月に制定された「史蹟名勝天然紀念物保存法」に始まります。この制度は，昭和 25（1950）年５月に制定された「文化財保護法」に引き継がれます。

史跡指定の基準は，翌昭和 26（1951）年に設定された「特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準」において，史跡とは「我が国の歴史の正しい理解のために欠くことができず，且つ，その遺跡の規模，遺構，出土遺物等において学術上価値あるもの」とされ，その中でも「学術上の価値が特に高く，わが国文化の象徴たるもの」が特別史跡となります。

史跡の意義　史跡に指定されるとどうなるか。その意義としてはおもに以下の５点が挙げられます。

①地域の歴史や文化を語る，地域を代表する文化財となる。

②地域の誇り・郷土愛，教育資源，観光資源，まちづくりの拠点となる。

③文化財保護法によって，半永久的に保護される。

④管理団体となる行政には保護する責務が，国民（地域住民）はその価値を享受する権利が生じる。

⑤土地の所有者の権利が最大限尊重される（文化財保護法第４条）。

鹿児島県の史跡　現在，史跡は全国に1,904件あり，そのうち鹿児島県には31件があます（全国29位）。最初の史跡指定は，大正10（1921）年３月３日に全国21府県で一斉に行われました。その時，鹿児島県では「隼人塚」と「大隅国分寺跡 附 宮田ケ丘瓦窯跡」が指定され，その３年後の大正13（1924）年12月９日に「指宿橋牟礼川遺物包含地」が史跡に指定されました。鹿児島県では３番目の指定になります。

４．史跡「指宿橋牟礼川遺物包含地」

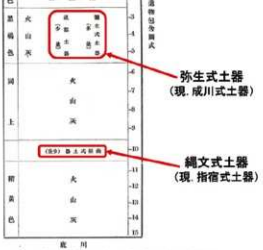
指宿橋牟礼川遺物包含地　史跡「指宿橋牟礼川遺跡」は，大正13（1924）年に指定されますが，その時の指定名称は「指宿橋牟礼川遺物包含地」でした。史跡指定がはじまった大正年間から昭和初期，史跡の指定はまだ蓄積が浅く，どのような遺跡にどのような名称を付けるのかルールもなかったようで，さまざまな指定名称がみられます。

「指宿橋牟礼川遺物包含地」はその名称が示すように，遺物を包含する状況が重要と判断され史跡に指定されました。下図右は，1921年の京都帝国大学文学部考古学研究報告第６冊に掲載された有名な土層図です。火山灰層を挟んで縄文（式）土器と弥生（式）土器が上下に分かれて包含されていた事実は，縄文土器が弥生土器に先行することを明確に示しており，このことが評価され史跡に指定されました。

最初の弥生土器は，明治17（1886）年に現在の東京都文京区弥生にあったとされる向ケ岡貝塚から発見されました。これにより，当時は縄文時代（石器時代）から古墳時代へという時代変遷に新たな時代が介在することが想定されだし，大正６（1917）年には九州大学医学部の中山平次郎により中間時代（金石併用時代）が提唱されました。しかし，縄文土器と弥生土器の共伴事例も多く，明確な位置づけがなかなか定まらなかった時に，指宿橋牟礼川遺跡が発見・発掘調査されたのでした。

山崎五十麿が1918年に報告した土層図

縄文式土器と弥生式土器が混在した層



濱田耕作が1921年に報告した土層図

史跡「指宿橋牟礼川遺物包含地」 さて，大正 13（1924）年 12 月 9 日に「指宿橋牟礼川遺物包含地」が史跡に指定された時の内容を確認しましょう。

> **大正 13 年 12 月 9 日内務省告示 777 号「指宿橋牟礼川遺物包含地」**
> **【所在地】**鹿児島県揖宿郡指宿村
> **【地　積】**民有地 参拾六筆 貳町五反五畝参歩
> **【説　明】**橋牟禮川両岸ノ臺地ニ在リ。表土ヨリ約二間ノ深サニ先史原史両時代ノ遺物ヲ包含セリ。其ノ間火山噴出物層状ヲナシテ堆積シ古代民族文化變遷ノ研究ニ資スベキ好遺跡ナリ。
> **【指定ノ事由】**保存要目 史籍ノ部第九ニ依ル
> **【保存ノ要件】**土地ノ發掘、遺物ノ採取ヲ禁ジ、其ノ他現状ノ變更ヲ来スベキ行為ヲ許可セザルコトヲ要ス。

指定の説明文は明快です。現代文にしますと「先史・原史の両時代の遺物を包含する。その間に火山噴出物が層状をなして堆積しており，古代の民族と文化の変遷に関する研究にとって重要な好遺跡である。」となります。つまり，この火山灰層の上下に縄文土器と弥生土器が分かれることで，古代の民族と文化の変遷研究に大きく寄与する，ということが最大の注目点であり，これを理由に史跡に指定されたのです。

ちなみに，ほぼ同時期に富山県氷見市の史跡「大境洞窟住居跡」でも，大正 7（1918）年に東京人類学教室によって発掘調査が行われ，縄文時代から中世まで 6 層に及ぶ層位的な状況が確認されました。しかし，この遺跡ではこの層位的状況自体が注目され，縄文土器と弥生土器の層位的な分離はほとんど注目されていませんでした。したがって，大正 11（1922）年の史跡指定に際しても，洞窟が住居として利用されたことが指定最大の理由となり，それが指定名称に反映しているのです。

5．史跡「指宿橋牟礼川遺跡」

平成 8（1996）年 3 月 28 日，史跡「指宿橋牟礼川遺物包含地」は追加指定・名称変更により，「指宿橋牟礼川遺跡」になりました。そのおもな理由は以下の 3 点になります。

①古墳時代中期・後期と平安時代の集落遺跡である。

②平安時代の遺構面を覆っている火山灰は『日本三代実録』に記録された貞観 16（874）年 3 月 4 日の開聞岳噴火に伴う噴出物であることを確認。

③遺跡は当初の指定範囲からさらに広がった。

つまり，これまでの縄文土器と弥生土器の層位的分離以外に，古墳時代中期・後期及び平安時代の集落遺跡であること。特に，平安時代の集落は『日本三代実録』に記録された貞観 16（874）年 3 月 4 日の「ある一日」の出来事を示している事実，文献史学と考古学が融合して得られる稀有な事例として，新たな価値づけが行われたのです。こうして「指宿橋牟礼川遺跡」は，さまざまな文化財的価値を有する珍しくて重要な遺跡となったのです。

６．史跡「指宿橋牟礼川遺跡」のもう一つの文化財的価値

史跡「小郡官衙遺跡群上岩田遺跡」と天然記念物「水縄断層」 福岡県には，『日本書紀』679（天武天皇７）年に筑紫で大地震が起き，多くの人々の死亡が記録されています。史跡「小郡官衙遺跡群上岩田遺跡」（小郡市）の金堂跡では，基壇に亀裂が入り，その周辺からは落下した大量の瓦が出土しました。また，筑後川に並行するように東西に屏風状に伸びる耳納山地の麓には，その大地震によって生じた東西 20km に及ぶ活断層の一部が天然記念物「水縄断層」（久留米市）として指定されています。これらは種別の異なる国の指定文化財ですが，679 年のある一日の出来事としての関係性が重視されています。

史跡「旧相模川橋脚」と天然記念物「旧相模川橋脚」 神奈川県茅ケ崎市には，1923（大正 12）年に発生した関東大震災による液状化現象に伴い，地中に埋没していた橋の橋脚が地上に現れた遺跡があります。これは『吾妻鏡』に記載された，源頼朝が渡り初めした橋の橋脚として考証され，1926（昭和２）年に史跡に指定されました。

近年，自然災害の痕跡，特に地震災害の痕跡を文化財として価値づけ，国の天然記念物として指定される事例が増えています。ところが，関東大震災の痕跡は，その価値づけが遅れたことと，その後の首都圏の急激な土地開発により，そういった痕跡がほとんど残っていませんでした。そこで，この旧相模川橋脚に新たな文化財的な価値づけがなされ，2016（平成 28）年に関東大震災の痕跡として国の天然記念物に指定されました。

史跡「指宿橋牟礼川遺跡」のもう一つの文化財的価値 先述したように，平成８（1996）年に「指宿橋牟礼川遺物包含地」の追加指定・名称変更が行われたときの要件には，「②平安時代の遺構面を覆っている火山灰は『日本三代実録』に記録された貞観 16（874）年３月４日の開聞岳噴火に伴う噴出物」があります。古代のある一日の生活面が判明している遺跡はごくわずかです。そのなかでも，その要因が開聞岳の噴火であること。また，それを示す火山灰の堆積を実際に遺跡で確認できる事例となると，この「指宿橋牟礼川遺跡」しかありません。すなわち，この「指宿橋牟礼川遺跡」は，もう一つの文化財的価値である天然記念物としての価値づけも可能と考えられるのです。

文化財保護を考える 文化財の価値は，時代や社会の変化によって変わっていきます。広島原爆ドームは，その危険性と戦争の負の遺産として，戦後何度も解体が検討されました。しかし，時間の経過とともに平和の象徴としての価値づけが醸成され，1966（昭和 41）年には広島市議会において永久保存が議決されました。その後は，1992（平成４）年に日本が世界遺産条約を批准し，1995（平成７）年には国の史跡に指定され，翌 1996（平成８）年には世界文化遺産に登録され，いま世界的な文化財になりました。

文化財保護を考えるとき，現在的事情や観点に捉われ，目先の対処療法に走る傾向にあります。しかし，その土地の歴史と文化をよく考え，そしてその文化財的価値を的確に見極めながら，将来的なまちづくりなどを見越した対応が必要です。史跡「指宿橋牟礼川遺跡」はその好例でもあります。

「日本考古学の父」濱田耕作と縄文土器研究

京都大学文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター　　千葉　豊

1．濱田耕作はなぜ，「日本考古学の父」と呼ばれるのか

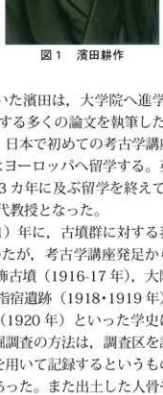


図1　濱田耕作

指宿橋牟礼川遺跡で，縄文土器と弥生土器が年代を異にすること，すなわち縄文文化と弥生文化が時代差であることを初めて遺跡で確かめた考古学者，濱田耕作（1881-1938）は「日本考古学の父」と呼ばれることがある。なぜ彼がそう呼ばれるのか，そこから始めることにしよう。

濱田は 1881（明治 14）年，大阪府南河内郡古市村（現・羽曳野市）で生まれた。大阪府立第一尋常中学校（現・北野高校），早稲田中学校（東京），第三高等中学校（京都）を経て，1902（明治 35）年，東京帝国大学文科大学史学科に入学し，西洋史学を専攻する。少年の頃より陵墓や遺跡めぐりを趣味とし，東京帝国大学学生時代には，明治期の考古学を特徴付ける日本石器時代人種論争において，坪井正五郎（1863-1913）と論争をかわし，早くも頭角をあらわしていた。

1905（明治 38）年，「希臘的美術の東漸を論ず」という卒業論文を書いた濱田は，大学院へ進学。美術雑誌『国華』の編集に従事しつつ，美術史の研究に専心し，美術史に関する多くの論文を執筆した。1909（明治 42）年，京都帝国大学文科大学史学科に講師として着任する。日本で初めての考古学講座を京都帝国大学に設置するためであった。1913（大正 2）年 3 月，濱田はヨーロッパへ留学する。英国では，エジプト考古学の F．ペトリーに師事して考古学の方法を学び，3 カ年に及ぶ留学を終えて，1916（大正 5）年，3 月帰国。9 月に考古学講座が正式に発足し，その初代教授となった。

考古学講座誕生以降の濱田の活動は目覚ましい。留学前の 1912（大正 1）年に，古墳群に対する我が国最初の組織的発掘と言われる宮崎県西都原古墳群の調査に参加していたが，考古学講座発足から 1920 年までのわずか 5 年間で，西都原古墳群（1916 年），熊本県下の装飾古墳（1916-17 年），大阪府国府遺跡（1917・1919 年），朝鮮半島の古墳・古蹟（1918 年），鹿児島県指宿遺跡（1918・1919 年），熊本県轟貝塚（1919 年），韓国金海貝塚（1920 年），鹿児島県出水貝塚（1920 年）といった学史に残る多くの遺跡の発掘調査を実施した。ヨーロッパ留学で培った濱田の発掘調査の方法は，調査区を設定し，層位学に基づいて遺物の上下関係を観察し，出土状況を測量や写真を用いて記録するというもので，今日においては当たり前と言えるが，当時においては最新の調査法であった。また出土した人骨や獣骨などは，専門家に鑑定を依頼するなど，体系的かつ総合的な調査を実施した。そしてその成果を調査報告書の形で世に出した。1916（大正 5）年 12 月から翌年 1 月にかけて調査された熊本県下の装飾古墳の報告書は，同年 5 月に『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』と題して，京都帝国大学文科大学考古学研究報告第 1 冊として刊行された。後述する『通論考古学』のなかで，遺跡の発掘は一種の破壊であるから，その記録をとること，その記録を報告書の形で，迅速に出版することが考古学者の義務であると濱田は述べている。『考古学研究報告』はまさに濱田の実践例であり，このシリーズは全 16 冊（第 15 冊・第 16 冊は濱田の死後）刊行されるが，これが今現在も続く発掘調査報告書の標準となった。

調査・研究の一方，「考古学通論」と題された講義ノートが「考古学の栞」と題して，学術雑誌『史林』に連載され，それを増補する形で 1922（大正 11 年）年，『通論考古学』として刊行された。「考古学とは何ぞや」から始めて，考古学の目的，考古資料の性質，発掘調査・資料集成・型式学・層位学・年

代決定などの研究法から調査研究報告書のありかた，遺物・遺跡の保存方法へ進み，考古資料を保管する場および教育・研究の場としての博物館の重要性まで，101 の項目にわけて考古学の体系を簡潔に叙述している。「69　層位学的方法」には，層位学の実例として指宿橋牟礼川遺跡の層位が掲げられており，このときの調査成果を濱田が重要視していたことがよくわかる。多くの指摘があるように，『通論考古学』は今日でも通用する部分が多い，不朽の名著である。1931（昭和 6）年には，金剣華による中国語訳が『考古学通論』と題して刊行されている（小野山 1990, p.102）。1929 年に刊行された『博物館』（日本児童文庫，アルス社，のち『考古学入門』と改題されて，講談社学術文庫，1976 年）は，博物館で濱田が子どもたちを案内しつつ，考古資料を通して人類の歴史を語る内容の考古学入門書として執筆されたもので，今日重要視される研究成果の社会的普及，教育・啓蒙にも積極的に取り組んだ。以上概観してきたように，日本考古学の体系化にあたって，土台を構築した濱田の役割がいかに大きかったかが理解できると思う。濱田が「日本考古学の父」と呼ばれるゆえんである。

2．濱田耕作による縄文時代研究

濱田の考古学的調査は，日本国内はもとより，朝鮮半島，中国大陸と東アジア一帯に及び，広範なものであったが，考古学講座開設からの 5 年間は多数の縄文時代遺跡を調査し，縄文文化の研究にも大きく寄与した時期であった。表 1 は，濱田が直接あるいはその指導のもとに実施した縄文時代遺跡の調査を一覧にしたものである。九州地方をオレンジ色，それ以外を黄色で表示している。

東京帝国大学学生時代におこなった伊豆大島の遺跡を別にすれば，フィールドは近畿地方（大阪府国府遺跡，京都府北白川小倉町遺跡），瀬戸内地方（岡山県里木貝塚，同・津雲貝塚，同・船元貝塚，香川県小蔦島貝塚），九州地方（宮崎県尾立貝塚，鹿児島県指宿遺跡，同・出水貝塚，熊本県轟貝塚，長崎県有喜貝塚）に広がっている。近畿以西の西日本の遺跡であること，貝塚遺跡が多いこと，京都から見れば遠隔地であるにもかかわらず九州の遺跡の比率が高いことなどが読み取れる。

表 1　濱田耕作の主要年譜と縄文時代研究関連事項

西暦	和暦	歳	事　項
1881.02.22	明治 14	0	大阪府南河内郡古市村で誕生
1899.09	明治 32	18	第三高等中学校入学
1902.07	明治 35	21	第三高等中学校卒業
1902.09	明治 35	21	東京帝国大学文科大学入学
1903.8.13	明治 36	22	伊豆大島野増村で火山性堆積物の下から，縄文土器採集
1905.07.11	明治 38	24	東京帝国大学文科大学卒業
1909.09	明治 42	28	京都帝国大学文科大学講師
1913.03.01	大正 2	32	京都帝国大学文科大学助教授
1913.03	大正 2	32	欧州へ留学（～ 1916.03.22 帰国）
1916.09	大正 5	35	日本最初の考古学講座の設置およびその担当
1917.06.02 ～ 06	大正 6	36	大阪府国府遺跡の発掘（第 1 回：研究報告第 2 冊，1918）
1917.09.28	大正 6	36	京都帝国大学教授
1918	大正 7	37	宮崎県尾立貝塚で縄文土器・石器採集（資料目録，1960）
1918.1，19.4	大正 7・8	37	鹿児島県指宿遺跡の発掘（研究報告第 6 冊，1921）
1919	大正 8	38	岡山県里木貝塚の発掘（第 1 回：清野謙次）
1919.08.20 ～ 29	大正 8	38	大阪府国府遺跡の発掘（第 2 回：研究報告第 4 冊，1920）
1919.09.06 ～ 13	大正 8	38	岡山県津雲貝塚の発掘（第 1 回：研究報告第 5 冊，1920）
1919.09.21 ～ 30	大正 8	38	岡山県津雲貝塚の発掘（第 2 回：研究報告第 5 冊，1920）
1919.12 ～ 1920.1	大正 8 ～ 9	38	岡山県津雲貝塚の発掘（第 3 回：研究報告第 5 冊，1920）
1919.12	大正 8	38	熊本県轟貝塚の発掘（研究報告第 5 冊，1920）
1920.12 ～ 21.1	大正 9 ～ 10	39	鹿児島県出水（阿崎）貝塚の発掘（研究報告第 5 冊，1921）
1920	大正 9	39	岡山県磯の森貝塚の発掘（島田貞彦，考古学雑誌 1-47）
1922	大正 11	41	岡山県里木貝塚の発掘（第 2 回：清野謙次）
1922.07	大正 11	41	『通論考古学』大鐙閣を刊行
1923	大正 12	42	京都府北白川追分町遺跡で，縄文土器・石器採集
1925	大正 14	44	長崎県有喜貝塚の発掘（八頭学雑誌 41-1・2 ・長崎県史跡名勝天然記念物調査報告書 5，1937）
1932.1	昭和 7	51	モンテリウス著（濱田訳）『考古学研究法』岡書院を刊行
1934.09.06 ～ 12	昭和 9	53	北白川小倉町遺跡の発掘（梅原末治・小林行雄）
1935	昭和 10	54	岡山県船元貝塚の発掘（三森定男，考古学論叢 1）
1936	昭和 11	55	香川県小蔦島貝塚の発掘（濱田・三森，考古学論叢 4）
1937.06.30	昭和 12	56	京都帝国大学総長
1938.07.25	昭和 13	57	死去（「後文殊院清陵常楽墓士」）

1917（大正 6）年におこなわれた大阪府国府遺跡の発掘調査は，地元の郷土史家によって採集された「大形粗石器」を欧州留学で学んでいた旧石器時代の石器ではないかと考えた濱田が，日本列島における旧石器時代の存否を確かめるために実施された。発掘の結果，「大形粗石器」は，土器とともに出土するという共伴関係を確認して旧石器ではないとした一方で，上層からは弥生土器を発見し，下層からは縄文土器とともに 3 体の埋葬人骨を発見することに

なった。続く国府遺跡第２回の調査(1919 年)では，7 体の埋葬人骨を発見している。いずれの調査でも，層位学的な発掘調査をおこない，発見された人骨の出土状況を写真図版と測量図で示し，発掘時の所見を詳細に報告している（濱田 1918，濱田・辰馬 1920）。

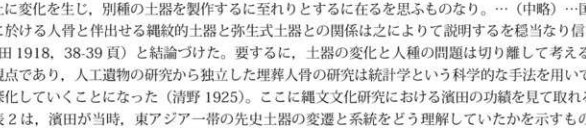
さきに，青年時代の濱田が坪井正五郎と石器時代人種論争を交わしていたことを記した。石器時代人種論争とは，日本列島に居住した石器時代人がアイヌなのかアイヌ神話に登場するコロボックルなのかに代表されるもので，萌芽期にあった明治時代の考古学を特徴付ける論争である。多くの論者（濱田もその一人）が石器時代人＝アイヌ説を唱える中，ただ一人石器時代人＝コロボックル説を唱え続けた坪井が 1913（大正 2）年に亡くなると論争そのものは下火となった。その一方で，石器時代の貝塚から出土する人骨に基づいた客観的な学説があらわれてきたのが大正年間であり，人骨が出土することが多い貝塚調査を濱田が多数おこなった背景には，客観的な証拠に基づいて日本石器時代人種論争に決着をつけたいという意図があったと考えてもよいであろう。

縄文土器，弥生土器という土器の違いを人種の違いと結びつけて解釈することが一般的であった当時において，国府遺跡の調査成果にもとづいて濱田は「同一民族が時代により種々の事情により土器の製作上に変化を生じ，別種の土器を製作するに至れりとするに在るを思ふものなり。…（中略）…国府遺跡に於ける人骨と伴出せる縄紋的土器と弥生式土器との関係は之によりて説明するを穏当なり信ずる」（濱田 1918，38-39 頁）と結論づけた。要するに，土器の変化と人種の問題は切り離して考えるという視点であり，人工遺物の研究から独立した埋葬人骨の研究は統計学という科学的な手法を用いて研究が深化していくことになった（清野 1925）。ここに縄文文化研究における濱田の功績を見て取れる。

表２は，濱田が当時，東アジア一帯の先史土器の変遷と系統をどう理解していたかを示すものである（濱田 1918，42 頁）。「原始縄紋土器」とは国府遺跡で発掘された縄文土器で，この土器の文様が年代的変化とともに簡素化して弥生土器を生み出す一方，反対に装飾が過剰に発達して「アイヌ縄紋土器」を生み出したと解釈した。ちなみに，「弥生式土器」のあとに置かれた「齊瓮土器」とは，現在は須恵器と呼称するやきもので，朝鮮半島南部で形成された陶質土器が古墳時代（５世紀前半）に日本列島に伝わって成立したことが明らかになっている。国府遺跡で弥生土器と縄文土器が層位的に上下の関係で出土することに気がつきつつも，東北地方に多い，縄文を施文し曲線文様で飾った縄文土器（「アイヌ式縄紋土器」）は「アイヌ」が製作した土器であるという伝統的見解を脱することができず，縄文土器と弥生土器は年代的に共存するという考えを完全には払拭できていない。この認識を大きく変わらせたのが，指宿橋牟礼川遺跡の発掘調査で明らかになった層位的な成果であった。

表２　国府遺跡の報告書に掲載された濱田耕作の縄文土器の年代と系統観（濱田 1918，42 頁掲載の表を改変）

日本發見土器手法變遷假想表



3．指宿橋牟礼川遺跡と指宿式土器

1918（大正7）年1月および翌年4月に指宿村を訪れて遺物包含層の発掘調査をおこなった濱田は，1920（大正9）年12月に調査した出水町（現・出水市）出水貝塚の調査成果とあわせて，『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第6冊として報告書を刊行する（濱田・島田1921，濱田1921）。

火山灰層をはさんで，上下の地層より遺物が出土した指宿遺跡を「「先史時代のポムペイ或はサンクリトン」とも名づく可き面白い考古学上の遺跡」と濱田が指摘したことはよく知られている事実であるが，その一文の後ろには「先年発見された伊豆大島野増村の溶岩流下の遺跡と並び称す可きものであろう」という文章が続いている（濱田1921，45頁）。伊豆大島野増村（現・東京都大島町野増）の遺跡とは，1901（明治34）年に発見された龍ノ口遺跡のことである。坪井正五郎，鳥居龍蔵，佐藤傳三など明治期の考古学・人類学で活躍した研究者が相次いで遺跡に訪れ，溶岩流の下から石器（縄文）時代の土器や石器が発見されたことを報告している（橋口1988，6-10頁）。濱田は東京帝国大学の学生であった1903（明治36）年8月13日に遺跡を訪れ[1]，溶岩流の下層から土器や石鏃を採集したことを『日本石器時代人民遺物発見地名表（第3版）』（京都大学文学研究科図書館蔵）の余白に記している[2]。青年時代に訪れた伊豆大島龍ノ口遺跡，留学時に訪問したポンペイの遺跡といった自然災害に遭遇した遺跡の経験が火山灰層を挟んで上下から遺物が出土する指宿橋牟礼川遺跡の調査に役だったと考えてもよいであろう[3]。

濱田は，指宿遺跡の下層から出土した土器を「純正石器時代の土器，所謂「貝塚土器」（俗にアイヌ式土器）と称せられるもの」（濱田1922，35頁）とし，また層位図の中では，「曲線式土器」という呼称も用いて説明した。一方で，同書に収められた出水貝塚出土土器は，「直線式模様」が主体で，熊本県轟貝塚，同阿高貝塚，あるいは沖縄県荻堂貝塚出土土器に類似すると説いて，「同国指宿村遺跡下層の土器製作者とは相隔れるものあり」（濱田・島田1922，p.11）と指摘している。「直線式模様」は「曲線式模様」の「堕落或は簡単化」と解する箇所（同，p.10）もあるので，指宿遺跡下層出土土器が出水貝塚出土土器より古いと考えているようにも読めるが，「土器に現はされたる言語の地方訛（デアレクト）を解読する」（同，p.11）という一文からは，同時代における土器製作集団の違い―明治期の鳥居龍蔵に代表される土器の違いを同時代における部族の違いと見る視点―に傾いていたようにも解釈できる。

指宿遺跡の結論では，「下層の貝塚式土器を作った古い石器時代の人民と，上層の弥生式土器を残した人民」は系譜的につながることを指摘し，「弥生式土器を伴出する石器時代の遺跡は其の後期のものであり，貝塚式土器を伴出するものは，その前期のものである」（濱田1922，pp.46-47）と断言した。国府遺跡で示されたような「アイヌ式縄紋土器」＝「貝塚式土器」と弥生土器が年代的に併行するというような系統観は完全に払拭された。その一方で，縄文土器に見られる遺跡ごとの多様なあり方に年代差を考慮するという視点には，なお達していなかった。縄文土器に地域的な多様性とともに年代による差を認め，器形や文様が共通する縄文土器のまとまりを「型式」という単位でくくって，縄文土器の編年研究を推進したのは，山内清男（山内1937）や小林行雄[4]といった新進の研究者たちであった。

その後，指宿橋牟礼川遺跡下層から出土した土器は，南九州の縄文時代後期前半の土器型式として「指宿式」と呼ばれるようになる。指宿式は，深鉢形ないしは鉢形で，口縁部がまっすぐ立ち上がるものと口頸部が外反しつつ立ち上がるものがある。胴部に2本沈線で文様を描くが，文様には曲線的な意匠（入組文，斜行する円弧文など）と直線的な意匠（靴形文，枠状文など）がみられる。曲線的な文様の場合，2本沈線の末端が入り組むことも特徴である。ゆるやかな山形の波状口縁となり，波頂部内面にも渦巻文などを描く文様帯をもつことも特徴に数え上げられる。このうち，靴形文で代表される一群は，代表的な出土遺跡である指宿市成川遺跡出土例から，「成川タイプ」（水ノ江1993，340頁）あるいは「成川K式」（三輪1998，64頁）と呼ばれる。このタイプは標式遺跡である指宿橋牟礼川遺跡からは出土していないので，指宿式の範囲からは除外し，かつ後期初頭の宮之迫式からの変化と捉え，指宿式より

古く編年するという考え方が首肯される。一方，指宿式は東方の磨消縄文土器（福田Ｋ２式）の影響を受けていることが古くから指摘されてきた。本州西部に分布域をもつ福田Ｋ２式は標式遺跡のある中部瀬戸内では３本沈線による磨消縄文が発達するが，それを取り巻くような四国や山陰，西部瀬戸内では沈線が３本化せず，中津式以来の２本沈線による磨消縄文が帯の幅を狭くしたり，沈線末端を入り組ませるといった変化を遂げつつ，分布することが明らかになっている（千葉・曽根 2010）。指宿式に認められる２本沈線による狭い帯，末端の入り組み，内面に見られる稜，斜行する曲線文，沈線が一筆書きにならずに交差するなどの特徴は，福田Ｋ２式の外郭地帯および福田Ｋ２式直後の初期縁帯文土器の影響を受けているとみてよい。一方で，器形や文様帯，基本的に縄文施文をしない（二枚貝腹縁による偽縄文はあり）といった特徴は，南九州在地の伝統から生み出されたものと理解する。

濱田は，『通論考古学』のなかで「新しき考古学は畢竟古き材料をいかに新しき方法を以て取り扱うかに存し，必ずしも新奇なる材料を探究するの一途に出でざるなり」(p.167) と記している。新しい遺跡の発見が考古学の発展を促すことは疑えないが，すでに蓄積されている資料を新しい方法や技術を用いて，新たな情報を読み取ることの重要性を指摘している。最後に，近年開発され応用が進んでいるひかり拓本というデジタル技術を用いて，濱田が発掘した指宿遺跡出土土器を掲げておきたい（図２）。

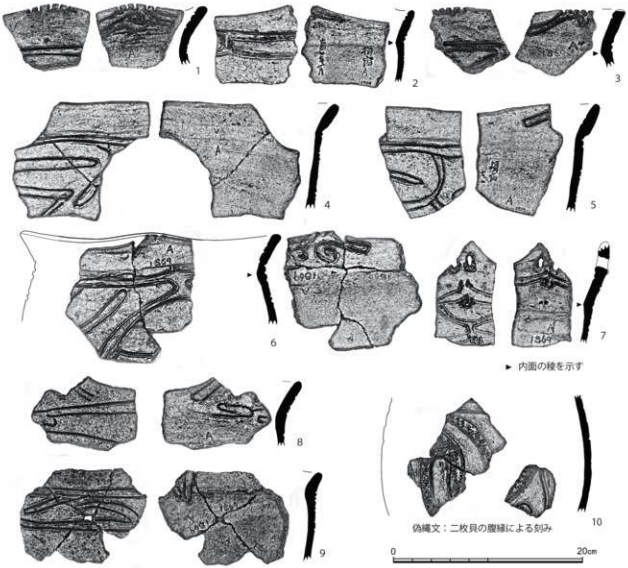


図２　濱田耕作の調査時に出土した「指宿式」土器のひかり拓本（断面図は指宿市教委 2016 の図を改変，京都大学総合博物館蔵）

注

1）報告書（濱田 1922，42 頁）では，野増村の遺跡へは明治 39 年に訪れたと記されるが，これは『地名表』にある直筆の記載が正しく，明治 36 年の誤植と思われる。

2）『日本石器時代人民遺物発見　地名表』は，東京帝国大学理科大学人類学教室を主宰した坪生正五郎が中心となって作成した石器時代の遺物発見地の一覧表である。初版が 1897（明治 30）年 7 月に刊行され，その後，新たな発見地を加えた増補版（第二版：1898（明治 31）年 5 月，第三版：1901（明治 34）年 5 月，第四版：1917（大正 6）年 12 月，第五版：1928（昭和 3）年 10 月）が刊行されている。濱田が所持した第三版は，刊行の年の 7 月 1 日，まだ第三高等中学校時代に東京帝国大学人類学教室にて入手したことが「清陵」（濱田の雅号）の署名ともに巻末に記されている。余白にはかにも遺跡見学の記録や採集した遺物のスケッチなどが記されており，濱田が本書を座右の書として野帳（フィールドノート）のように利用していたことがわかって興味深い。なお，このとき濱田によって採集された遺物の一部は，京都大学総合博物館で所蔵しており（横山・佐原 1961，132 頁），指宿橋牟礼川遺跡出土土器ともに，2017 年開催の特別展『火焔型土器と西の縄文』で展示した。

3）指宿橋牟礼川遺跡出土土器も野増村出土土器も紅色をしていることを熟した火山灰による変色であろうと濱田は指摘している（濱田 1922，40-41 頁）。近年，黒川忠広はその特徴的な色調は，指宿地方で認められる「温泉変質粘土」を利用したためであることを実験考古学的に明らかにしている（黒川 2005）。

4）小林行雄は弥生土器の様式論的研究で有名であるが，1935 年刊行の北白川小倉町遺跡の報告書（梅原 1935）で，出土層位と遺跡間の差を用いて，北白川下層式（前期），北白川上層式（後期）を設定し，戦後になって確定する北白川下層式の細別（北白川下層Ⅰ・Ⅱａ・Ⅱｂ・Ⅱｃ・Ⅲ）にかかわる土器分類をおこなっていた。東日本の縄文遺跡を中心に，山内らが開始していた縄文土器編年研究と比較しても遜色ないレベルに達していた（千葉 2020）。なお，報告書は梅原末治の名前で刊行されたが，土器の整理・分類は小林がおこない，小林が執筆した原稿が近年公表されている（小林 2017）。

参考文献

有光教一　1974 「学史上における濱田耕作の業績」『日本考古学選集』13，築地書館，2-8 頁

泉　拓良　1984 「濱田耕作論」『縄文文化の研究』10，雄山閣，205-214 頁

泉　拓良　2011 「ベトリーが濱田に伝えた考古学の研究法」『埃及考古』京都大学総合博物館開館 10 周年記念企画展図録，40-41 頁

指宿市教育委員会　2016 『橋牟礼川遺跡 総括報告書』

梅原末治　1935 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀年物調査報告』第 16 冊，京都府

小野山節　1990 「東洋学の系譜 8 －濱田耕作」『月刊しにか』第 1 巻第 8 号，100-105 頁

清野謙次　1925 『日本原人の研究』岡書院

黒川忠広　2005 「指宿式土器の色調から見た交流の断片」『縄文の森から』第 3 号，鹿児島県立埋蔵文化財センター，17-27 頁

小林行雄　2017 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告（稿）」『小林行雄考古学選集』第 3 巻，真陽社

千葉　豊　2020 「北白川小倉町遺跡における土器分類－梅原末治と小林行雄の分類とその背景－」『関西縄文論集』4，関西縄文文化研究会，55-64 頁

千葉豊・曽根茂　2008 「型式論の可能性」『縄文時代』第 19 号，縄文時代文化研究会，103-132 頁

東京帝国大学編　1901 『日本石器時代人民遺物発見　地名表』第 3 版

橋口尚武　1988 『島の考古学』考古学選書 3，東京大学出版会

濱田耕作　1918 「河内国府石器時代遺跡発掘報告」『京都帝国大学文科大学考古学研究報告』第 2 冊，京都帝国大学

濱田耕作・辰馬悦蔵　1920 「河内国府石器時代遺跡第二回発掘報告」『京都帝国大学文科大学考古学研究報告』第 4 冊

濱田耕作・島田貞彦　1921 「薩摩国出水郡出水町尾崎貝塚調査報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第 6 冊

濱田耕作　1921 「薩摩国指宿郡指宿村土器包含層調査報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第 6 冊

濱田耕作　1922 『通論考古学』大鐙閣（引用は岩波文庫版，2016 年に拠る）

春成秀爾　2016 「［解説］日本考古学の父，濱田耕作」『通論考古学』岩波文庫，267-295 頁

水ノ江和同　1993 「九州の縁帯文土器」『古文化談叢』30，323-366 頁

水ノ江和同・前迫亮一　2010 「Ⅱ 各地域の土器編年 1．九州」『西日本の縄文土器』真陽社，21-67 頁

三輪晃三　1998 「第 5 章 南九州縄文後期再論」『武貝塚発掘調査研究報告書』奈良大学文学部考古学研究室，53-120 頁

山内清男　1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第 1 巻第 1 号（『山内清男・先史考古学論文集』第二冊，1967 年，45-48 頁，再録に拠る）

横山浩一・佐原真　1960 『考古学資料目録』1，京都大学文学部

＊指宿式土器に関する戦後の論考の多くは割愛し，主要なものを掲げるにとどめた。

鹿児島県考古学研究の歩みと指宿橋牟礼川遺跡

鹿児島県文化財保護審議会会長・元鹿児島大学教授　　本田　道輝

日本の近代考古学は，明治 10（1877）年のエドワード .S. モース氏による大森貝塚（東京都品川区）の発掘調査とその報告（モース 1879）に始まったと言われています[1]。同様に鹿児島県の場合は，大正 3（1914）年のニール .G. マンロー氏による柊原貝塚（垂水市柊原）や石郷遺跡（鹿児島市吉野町）の発掘調査とその報告（マンロー 1915）が挙げられます。同じ頃から地元を代表する考古学研究者として山崎五十麿氏や瀬之口傳九郎氏の活動も始まりました。山崎氏は大蔵省専売局鹿児島支局に勤務しながら考古学研究を行い，当時の交通事情の悪さにもかかわらず鹿児島県内全域を対象に精力的に遺跡や遺物の調査研究を続け，一方瀬之口氏は出身地の宮崎県へ移るまでの間旧制志布志中学校教諭として勤務しながら考古学研究を行い，とりわけ大隅地方の古墳や歴史時代の板碑，経筒等の調査研究を続けました。この二人の調査研究の成果は『考古学雑誌』などを通じて発表され，全国の研究者に鹿児島の状況を知らしめる大きな役割を果たしました（池畑 2000）。

ところで，この二人の研究者は京都帝國大学による指宿橋牟礼川遺跡発掘調査にも大きく関わっていますので簡単に触れておきます。大正 5（1916）年指宿出身で志布志中学校生徒であった西牟田盛健氏が，指宿村丈六付近で土器を拾い中学校に持って行くことがありました。大正 6（1917）年瀬之口氏のもとを訪れた京都帝國大学の喜田貞吉氏が中学校所蔵の遺物を見学した際，この西牟田氏採集の土器（同じ遺跡に縄文土器や弥生土器[2]が存在すること）に注目し山崎氏に調査を依頼（喜田 1918），山崎氏は遺跡の場所や二種の土器が混在して出土するという調査結果を『考古学雑誌』に投稿（山崎 1918），当時この二種の土器の違いが何を意味するのか学界でも議論になっていたこともあり，この遺跡の存在は広く知られるようになりました（鎌田・中摩・渡部 2009）。

大正 6（1917）年国府遺跡（大阪府藤井寺市）の調査結果（濱田 1918）から縄文土器と弥生土器の違いは民族の違いではなく時代の違いであると考えた京都帝國大学の濱田耕作氏は，喜田氏や山崎氏の報告に強い関心を示し，大正 7（1918）年宮崎出張の帰りに半日現地調査に訪れ，翌大正 8（1919）年には山崎氏の他東北帝國大学の長谷部言人氏，京都帝國大学考古学教室員の島田貞彦氏，榊原政職氏とともに発掘調査を実施しました[3]。その結果，厚い火山灰層を挟んでその上層に弥生土器や須恵器，下層に縄文土器[4]が出土することから，二種の土器の違いは時代の違いである（濱田 1921）ということが明確になったのです(図 1)。その学術的意義から，この遺跡は大正 13（1924）年指宿橋牟礼川遺物包含地として国の史跡に指定される

図 1　大正 8 年の京都帝国大学調査時の地層と出土した土器

（濱田 1921 と指宿市教委 2016 より作成）

ことになりました(現在では追加指定地も含め,指宿橋牟礼川遺跡と名称変更して保存されています)。

昭和に入ると寺師見國(てらしみくに)氏の活動が始まります。寺師氏は大口市（現伊佐市）で開業医としての仕事と並行して考古学研究をおこなったことでよく知られていますが，昭和５（1930）年早稲田大学で考古学を学び旧制大口中学校教諭として赴任してきた木村幹夫(きむらみきお)氏との出会いが大きな刺激になったようです（木村 1980）。木村氏は鹿児島を去るまでの９年間，大口盆地の遺跡調査から始めて県内各地の縄文時代から歴史時代までの幅広い年代の遺跡を調査研究し，その成果を『考古学雑誌』などで報告しました。寺師氏は木村氏と共同で研究を続ける一方，木村氏が鹿児島を去った後は研究対象の地域や時代を広げ，縄文土器の分類と編年（縄文土器を形や文様などで分類し，時間軸の上に配列する），弥生土器の集成や分類，南九州独特の古墳の調査，神社などに伝わる鏡の集成と分類等を種々の雑誌に発表し大きな功績を残しました（池畑 2003）。

戦後になると河口貞徳(かわぐちさだのり)氏の活動が始まります。河口氏は長く玉龍高校教諭として勤務しながら数多くの遺跡を発掘調査し，南九州の縄文時代～古墳時代の土器編年の研究を続け，寺師氏の研究成果をさらに進展，充実させていきました。また，当時混沌としていた奄美諸島出土土器の分類と編年を手掛けたことでも知られています。これらは「河口編年」と呼ばれ，現在でも南九州や南島の土器編年の指標とされています。なお，河口氏は玉龍高校在職中に考古学部を立ち上げ多くの遺跡で部員と共に発掘調査を続ける[5]とともに，折々に調査地の郷土史研究家や学校の先生方，生徒達にも参加してもらうことによって考古学の理解者拡大にも貢献，退職後は自宅を提供して勉強会を開くなどして研究者の育成にも積極的でした（本田 2020）。

ところで，寺師氏や河口氏は鹿児島大学に赴任した三友國五郎(みともくにごろう)氏と共に昭和 24（1949）年鹿児島県考古学会を創立し，その３年後には新たに指宿高校に赴任した国分直一(こくぶなおいち)氏を加えて会誌として『鹿児島県考古学会紀要』を刊行，時には共同で時には競い合うように，会員による研究活動は進展していくことになりました。会誌は一時中断したこともありましたが，『鹿児島考古』と雑誌名を変えて現在第 53 号まで刊行され多くの会員の研究成果発表の場となっています[6]。なお，その間昭和 40 年代は日本各地で開発の規模や件数が大幅に拡大増加し遺跡が破壊される事が多くなった時期で，全国で遺跡保存・保護運動が盛んに行われるようになった時期でもありました。鹿児島県も例外ではなく，埋蔵文化財の保存・保護をめぐって行政と鹿児島県考古学会や考古学会の中核をなす方々によって作られた鹿児島県史跡調査会が激しく対立することもあったのです（上村 1972）。今では開発行為には県や市町村に配置された埋蔵文化財担当職員の方々が対応し，必要に応じて発掘調査を実施し報告書が作成されていますが，このようなシステムが生まれた背景には過去の激しい対立や葛藤，論争があったことも忘れてほしくないものです。現在では旧石器時代から第二次世界大戦の頃までの幅広い時代の遺跡が発掘調査の対象となり，また調査面積も昔の調査では考えられない規模に拡大しています[7]。当然のことながら，資料の増加に伴って以前の通説が見直されることは多々あり，その背景には理化学的分析法を含む各種分析法の深化と発展も大きく寄与しています。

一方昭和 55（1980）年には鹿児島大学，平成 12（2000）年には鹿児島国際大学に考古学研究室が設置され研究者の育成が図られていますし，発掘現地での遺跡説明会や考古学に関連する講演会も多く開催されるようになり，県立上野原縄文の森展示館や指宿市考古博物館時遊館 CoCCo はしむれのように出土遺物を展示する博物館や資料館も県内各地にみられ，一般の方々が考古学という学問に触れ考古資料を直接目にする機会も格段に増加して現在に至っています。

それでは，京都帝國大学による指宿橋牟礼川遺跡の調査成果について，研究が進み現在どう理解されているのかを述べてまとめにしたいと思います。濱田氏の報告後火山灰と考古学の関係についてはあまり関心が向けられていませんでしたが，1970 年代後半以降考古学研究者の間にもサツマ層やアカホヤ層の認識が広まり[8]，俄然テフラ(火山噴出物)と遺物の関係性が注目されるようになりました。

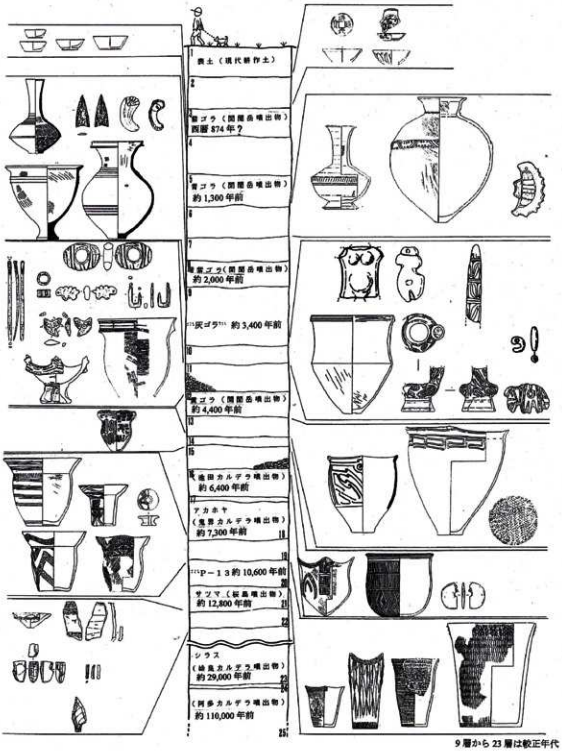


図２　鹿児島県の地層（模式図）と遺物との関係

そのような中で，新東晃一氏を代表とする「南九州縄文研究会」は積極的に議論を進め，結果平成７（1995）年重要な考古学賞の一つである藤森栄一賞（長野県考古学会）を受賞することになったのは鹿児島の考古学界全体にとってもうれしい出来事でした。活動の一翼を担っていた，火山地質学が専門で以前指宿高校にも勤務したことがある成尾英仁氏は，精力的な踏査と研究で開聞岳噴出物の分析も押し進め（指宿橋牟礼川遺跡に堆積する火山灰の噴出源は鰻池とされていましたが，その後の研究で開聞岳が噴出源であることが判明），開聞岳噴出物に５枚の固結したテフラ（地元でコラ層と呼ばれる火山噴出物層）を確認し，その色調から下層から黄コラ，灰コラ，暗紫コラ，青コラ，紫コラと命名しました（成尾 1986）。現在，遺物や遺構との関係から黄コラは縄文時代後期前半の指宿式土器の時期，灰コラは縄文時代末頃の時期，暗紫コラは弥生時代中期後半の山ノ口式土器の時期，青コラは７世紀後半ごろの時期と考えられています。一方紫コラについては，これまで考古学，文献史学，火山地質学それぞれの立場での検討の結果，『日本三代実録』に記録された貞観 16（874）年３月の開聞岳火山噴出物であるとして説明されてきました（永山 1992，成尾 1992，指宿市教委 2016 など）。しかし近年の調査成果や紫コラ直下から出土する土器（須恵器や土師器）の年代観（８世紀後半から９世紀前半）から，指宿市教委の松崎大嗣氏は紫コラについてこれまで考えられてきた降下年代よりも 50 年～ 100 年古くなる可能性を指摘しています（松崎 2018，2022）。この問題に関しては，これまでの資料の再検討や新しい資料の追加等で，慎重かつ早急に議論し解決していくことが望まれます（図２）。

ところで，京都帝國大学の報告書で濱田氏は「この遺跡は火山の噴出によって，その火山灰の中に埋もれ，泥流磐の下に没してしまった『先史時代のポンペイ或いはサントリン』とも名づけるべき面白い考古学上の遺跡である」と述べましたが，指宿橋牟礼川遺跡の調査が進むにつれてそれを具体的に物語るように紫コラで埋没した畑地や道，建物さらには倒壊した建物まで検出され，火山災害と人々の生活の関連を研究する遺跡としても極めて重要であることが再認識されました（指宿市教委 2016）。また指宿橋牟礼川遺跡から北西約２ｋｍの敷領遺跡でも，同様に指宿市教委や鹿児島大学・お茶の水女子大学合同学術調査によって畑地や道，倒壊建物等が検出され，より広範囲での火山災害の状況や人々の対応を知ることができるようになりました（鷹野編 2009・2010，指宿市教委 2010・2014 など）。なお，指宿橋牟礼川遺跡からは転用硯や青銅製帯金具（丸鞆・巡方），墨書土器（厨・真），柵列と思われる杭列，一方敷領遺跡からは転用硯や簡略化された亀卜に用いた甲羅と思われる五角形状の鉄製品，墨書土器（奉？・鞆・智），主軸方向が揃った掘立柱建物や総柱の高床建物や柵列が検出されており，両遺跡はやや時期を違えた揖宿郡衙の候補地とも考えられています（下山 2003，指宿市教委 2016）。

次に『橋牟礼川遺跡総括報告書』（指宿市教委 2016）に再録された京都帝國大学発掘の土器資料を見てみましょう。下層から出土した土器には縄文時代中期と思われる破片や弥生時代前期の壺の破片も見られますが，多くは濱田氏のいう曲線式土器で，かつて指宿下層式土器と呼ばれ現在指宿式土器と呼ばれている土器に該当します。縄文時代後期前半に位置付けられ，二本の並行する線で描かれた直線的な文様や曲線的な文様が特徴的で，土器の形状にいくつかの種類がありますが，その背景には四国方面の磨消縄文文化との接触・影響があると考えられています。指宿式土器に次いで多いのは市来式土器（標式遺跡は日置市市来町市来貝塚）です。この土器は縄文時代後期中頃に位置付けられ，昭和 30（1955）年の宇宿貝塚（奄美市笠利町宇宿）発掘調査で南島土器群に伴って発見され，これまで不明瞭だった南島土器群の年代的位置や縄文時代の南島と九州本土との交流を考える足掛かりを作った土器として有名です（国分ほか 1959）。

上層から出土した土器は指宿上層式土器と呼ばれていましたが，昭和 32・33（1957・1958）年の成川遺跡（指宿市山川町成川）の発掘調査では同様な特徴を示す全形が分かる土器等が多数出土

し（田村編 1974），やがてそれらは成川式土器と総称されるようになりました。この土器群は，一時期脚台付甕や文様をもつ大壺等の存在から弥生後期土器と考えられていましたが，成川式土器の中には古墳時代の須恵器と同時期であることを示す出土例も増え，その分類や年代的位置づけが議論されることになったのです。そのような中で，中村直子氏は弥生時代後期土器から成川式土器と総称されていた土器群までを分類，編年し表として示しました（図3）。それによれば，指宿橋牟礼川遺跡で上層から出土した土器の多くは成川式土器群中最後の段階の土器で笹貫式土器（標式遺跡は鹿児島市上福元町笹貫遺跡）と呼び，実年代は6世紀代と判断しました（中村 1987）。その後調査が進展して資料も増加し，南九州において弥生時代後期から古墳時代にかけて続くと思われていた特徴的な中空脚台を持つ甕は，生活用具としての土器が次第に外来系の土器に変化していく中，驚くことに紫コラ直下の被災建物からも検出されて，この時期までは伝統的な煮沸形態としての脚台付甕が残存することが明らかになりました（指宿市教委 2015）。指宿上層式土器を含む成川式土器群の分類と編年[9]，それらを実生活で使用していた人々の社会構造等の研究は，古くて新しい課題として今後も検討が続いていくことになります。

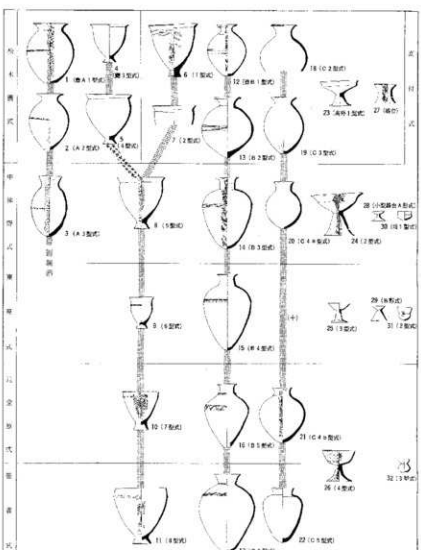


図3　成川式土器編年表

（中村 1987 より転載）

注

1）モース氏は明治 12（1879）年 5 月鹿児島を訪れています。専門の貝類標本の収集が主な目的でしたが，鹿児島から錦江湾を横断する際見えた開聞岳や大隅半島の山並み，上陸した元垂水（垂水市）で見たはねつるべのある農家のスケッチ等を残しています。また，西南戦争 2 年後の鹿児島の様子や人々の生活にも触れ，案内されて終原付近で見た厚い貝層（地元ではこれを焼いて石灰を作っていた）に関する考察をし，その帰りにある家に立ち寄り大学博物館のため変わった形をした卵形の壺をもらった（現在いうところの成川式土器の壺？）などの記述が見られます（モース 1970）。

2）当時の言い方でいえばアイヌ式土器と弥生式土器。

3）翌年の大正 9（1920）年には長谷部・濱田・島田氏は出水貝塚（出水市中央町）の発掘調査もおこなっています。近年，調査地土地所有者のお宅に長谷部氏が出水貝塚保護の重要性を説明し，濱田氏と連名で署名した直筆の手紙（巻物に装丁され木箱に入れて大切に保管）や，島田氏や東北帝國大学総長の直筆のお礼状が存在することが明らかになりました（本田 2022）。これらの書簡は出水貝塚出土遺物とともに県の文化財に指定されています。

4）当時の言い方でいえば上層に弥生式土器，祝部式土器，下層に貝塚式（アイヌ式）土器。ただし，ここにいう弥生式土器は現在では古墳時代後半期の土器，貝塚式土器は縄文時代後期の土器と認識されています。

5）昭和 50 年代前半頃までは，県内いくつかの高校に考古学に関わる部活動があり（鹿児島県考古学会　2023），発掘調査もその一環で行われることが多かったのです。やがて卒業生の中からは教師や行政の埋蔵文化財担当職員となり研究者として活躍する人たちが現れます。部誌としては，玉龍高校考古学部の『TRENCH』，出水高校考古学部の『もぐら』，吹上高校社会研究部の『ふきあげ』がよく知られています。

なお，昭和 20 年代から昭和 30 年代にかけて指宿高校には国分直一氏・河野治雄氏・小野重朗氏・重久十郎氏という考古学や民俗学の著名な研究者が勤務し，その指導のもと指宿高校郷土研究部が活動，『薩南民俗』を刊行していたことが知られています。近年指宿高校郷土研究部が再び活動を始めたと聞き，大いに声援を送りたいと思います。

6）その他に鹿児島県内の考古学に関連する学会や発行されている雑誌には以下のようなものがあります（一部休会，休刊中のものあり）。

隼人文化研究会『隼人文化』，種子島考古学研究会『潮流』，南九州縄文研究会『南九州縄文通信』，奄美考古学研究会『奄美考古』，人類史研究会『人類史研究』，大河同人『大河』，南九州城郭談話会『南九州の城郭』，鹿児島陶磁器研究会『カラカラ』，南日本文化財研究刊行会『南日本文化財研究』

なお，鹿児島県立埋蔵文化財センターでは平成 15（2003）年から『研究紀要　縄文の森から』を刊行しており，大学や市町村の博物館や資料館の企画展等の図録や市町村誌（史）にも考古学関連の記述を見ることができます。

また，鹿児島県教育委員会は平成 17（2005）年，平成 18（2006）年『先史・古代の鹿児島　資料編』，『先史・古代の鹿児島　通史編』という大冊を刊行し，多くの研究者の協力を得てその時点までの研究の到達点を明らかにしました。

7）現在日本各地で行われている発掘調査の 9 割以上が開発のための事前調査です。当然調査終了後は開発側に引き渡され，遺跡の中の調査部分は消失することになります。一例を挙げますと，昭和 56（1981）年鹿屋市の国道バイパス工事で調査された王子遺跡は，弥生時代中期後半時期の集落構造やその立地のあり方，遠隔地交流をうかがわせる遺物の発見等で注目され，昭和 58（1983）年鹿児島県考古学会や鹿児島県史跡調査会は遺跡の現地保存を訴え保存運動を始めました。日本考古学協会や文化財保存全国協議会からも遺跡保存の要望書が提出され，半年で全国から約 3 万 6 千人の賛同署名も集まりましたが，残念ながら保存される事はありませんでした（本田 2021）。

調査後保存された稀な例としては上野原遺跡（霧島市国分）を挙げておきます。遺跡は昭和 61（1986）年工業団地（上野原テクノパーク）造成中に発見，その後継続的に調査され縄文時代から第 2 次世界大戦までの遺構や遺物が検出されますが，とりわけ平成 3（1991）年からの調査（3 工区）で，台地南東部で遺物が径 100 m 程の環状に広がる側所が検出され，その中では縄文時代早期後葉の壺や石斧が埋納された状態で発見されました。また，平成 7（1996）年からの調査（4 工区）では，台地北東部で縄文時代早期前葉の定住化初期の様相を典型的に示す集落も発見されました（新東 2006）。平成 9（1997）年知事は結果を受けて保存することを表明，同じ年に上野原遺跡（3 工区）出土品が国の重要文化財に指定，平成 11（1999）年には上野原遺跡（4 工区）が国の史跡に指定されました。現地は「鹿児島県上野原縄文の森」として整備され，鹿児島県立埋蔵文化財センターや上野原縄文の森展示館が併設されています。

8）桜島は大正 3（1914）年大噴火を起こしましたが，それ以前に 16 枚のテフラ（火山噴出物）が確認されています。このうち約 12800 年前の火山噴出物はサツマ火山灰（桜島パミス）と呼ばれ，その層の下から検出される土器や石器群が縄文時代草創期に属することが明確になりました。一方アカホヤ層は，約 7300 年前の鬼界カルデラ（三島村竹島から硫黄島の海底に広がる海底火山）噴出物で，その層を境に変化する土器を含む遺物や遺構について研究者の間からは種々の報告や意見が提出され，土器編年の逆転や文化の断絶等が議論されることになりました。

9）成川式土器と総称されていた土器の資料が増加する中で，鹿児島大学総合研究博物館では構内から出土する該当土器を紹介する

とともに，成川式土器全般を多くの視点から検討し，その時点までの研究の到達点を示しました（橋本編　2015）。一方，松崎氏は増加する資料をまとめ新たな編年案を示しています（図 4）（松崎 2021）。

参考文献

池畑耕一　2000「鹿児島県考古学界の先人たち（2）」『鹿児島考古』第 34 号　鹿児島県考古学会
2003「鹿児島県考古学界の先人たち（5）」『鹿児島考古』第 37 号　鹿児島県考古学会

指宿市教育委員会　2010『平成 21 年度市内遺跡確認調査報告書（敷領遺跡・大園原遺跡・山王遺跡・森山遺跡）　指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書 47 集
2014『平成 26 年度市内遺跡確認調査報告書（敷領遺跡・松尾城跡Ⅲ・その他市内遺跡）　指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書 54 集
2015『敷領遺跡・松尾城跡Ⅲ・その他市内遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書 55 集
2016『橋牟礼川遺跡総括報告書』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書 56 集

鹿児島県考古学会　2023「（特集 1）鹿児島県考古学会 70 年の歩み 3」『鹿児島考古』第 52 号

鎌田洋昭・中摩浩太郎・渡部徹也　2009『橋牟礼川遺跡』日本の遺跡 40　同成社

上村俊雄　1972「亀脈なる文化財行政」『鹿児島考古』第 6 号　鹿児島県考古学会

喜田貞吉　1918「九州旅行談」『考古学雑誌』第 8 巻第 7 号　日本考古学会

木村幹夫　1980「私の半世紀　―青春，教育，研究，そして戦争―」『木村幹夫考古学論文集』木村婦美編

国分直一・河口貞徳・曽野寿彦・野口義麿・原口正三　1959「奄美大島の先史時代」『奄美・自然と文化』日本学術振興会

下山　覚　2003「鹿児島県指宿市敷領遺跡出土の鉄製品について」『考古学雑誌』第 87 巻第 3 号　日本考古学会

新東晃一　2006『南九州に栄えた縄文文化・上野原遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」027　新泉社

鷹野光行（編）2009『敷領遺跡（中敷領地点）の調査』お茶の水女子大学博物館学研究室・鹿児島大学法文学部比較考古学研究室
2010『敷領遺跡（中敷領地点）第 2 次調査』お茶の水女子大学博物館学研究室・鹿児島大学法文学部比較考古学研究室

田村晃一（編）1974『成川遺跡』文化庁　埋蔵文化財発掘調査報告第七　吉川弘文館

中村直子　1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第 6 号　鹿児島大学法文学部考古学研究室

永山修一　1992「『日本三代実録』に見える開聞岳噴火記事について」『橋牟礼川遺跡Ⅲ』
指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（10）　指宿市教育委員会

成尾英仁　1986「開聞岳と遺跡」『隼人文化』№ 18　隼人文化研究会
1992「橋牟礼川遺跡の地質」『橋牟礼川遺跡Ⅲ』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（10）　指宿市教育委員会

橋本達也（編）2015『成川式土器ってなんだ？』鹿児島大学総合研究博物館第 15 回特別展展示解説　鹿児島大学総合研究博物館

濱田耕作　1918「河内国府石器時代遺跡発掘報告」『京都帝國大学文科大学考古学研究報告』2 巻　京都帝國大学
1921「薩摩國指宿郡指宿村土器包含層調査報告」『京都帝國大学文学部考古学研究報告』第六冊　京都帝國大学

本田道輝　2020「< 考古学人国記 >（24）　生涯現役の考古学研究者　河口貞徳」『古代文化』第 72 巻第 2 号　古代学協会
2021「鹿児島県考古学会の 70 年を振り返って」『鹿児島考古』第 50 号　鹿児島県考古学会
2022「出水貝塚発掘調査に係る巻物・書簡」『鹿児島県文化財調査報告書』第 68 集　鹿児島県教育委員会

松崎大嗣　2018「開聞岳貞観噴火による火山災害とその後」『隼人文化研究会第 500 回記念例会資料集』隼人文化研究会
2021「成川式土器の分類と編年」『地域政策科学研究』巻 18　鹿児島大学
2022「紫コラ火山灰の降下年代再考」『地域考古学研究の可能性Ⅱ　中摩浩太郎さん退職記念論集』指宿市考古博物館時遊館 COCCO 橋牟礼記念論集刊行会

マンロー，N.G. 1915「太古の大和民族と土蜘蛛」津田敬武訳　『考古学雑誌』第 6 巻第 4 号　日本考古学会

モース，E.S.　1879『大森介墟古物編』矢田部良吉訳　東京帝國大学
1970『日本その日その日』石川欣一訳　東洋文庫 172　平凡社

山崎五十麿　1918「アイヌ式土器彌生式土器及石器等を包含する遺跡」『考古学雑誌』第 8 巻第 7 号　日本考古学会

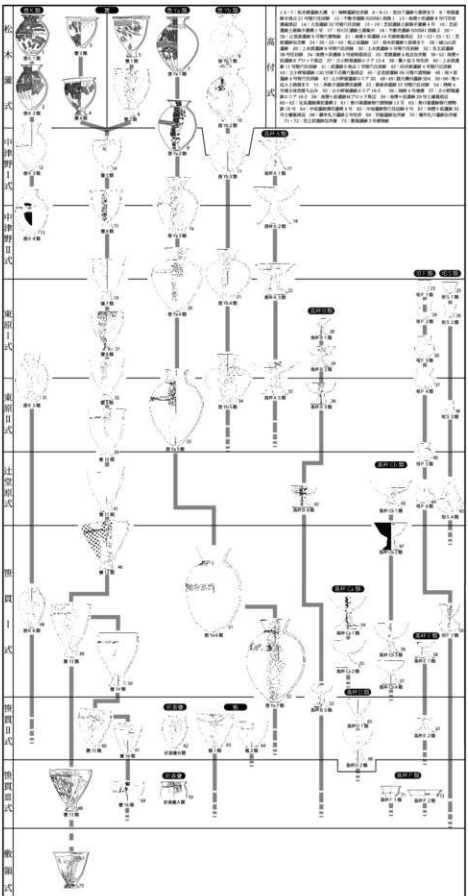


図４　成川式土器編年表

（松崎 2021 より転載）

火山灰考古学と指宿橋牟礼川遺跡

九州大学大学院比較社会文化研究院　　桒畑　光博

1．はじめに

鹿児島県指宿市の国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡は，わが国における火山灰考古学の発祥の地と言える。すなわち，日本考古学の父と呼ばれる濱田耕作が大正8（1919）年4月に指宿橋牟礼川遺跡（当時は指宿村土器包含層や薩摩指宿遺跡などと呼称）の発掘調査を行って，火山灰層を挟んで上の地層から弥生土器，下の地層から縄文土器が出土することを確認し，その成果を大正10（1921）年刊行の報告書（濱田 1921）に収録するとともに，大正11（1922）年には，日本で初めての考古学入門書である『通論考古学』（濱田 1922）の中において，層位学的方法の手本となる事例として紹介したのである（図1）。

今回は火山灰考古学とは何かについて紹介するとともに，その一領域である火山災害考古学の南九州における研究史に触れつつ，そのような視点から，指宿橋牟礼川遺跡の価値と魅力を探ってみたい。

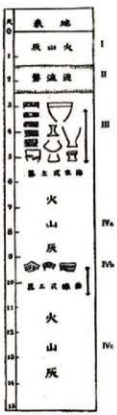


図1　地層模式図
（濱田 1922 より転載）

2．火山灰考古学とは

火山灰考古学とは，火山灰（テフラ[1]）を考古学の調査・研究に利用した研究分野である（長崎 2006）。1970年代後半から1980年代にかけて，日本列島に広域に分布する火山灰である広域テフラの認識が進展し，これらのテフラが発掘調査の指標層として盛んに利用されるようになった。そのような中で，1980年代の終わりには，火山灰考古学という言葉が活字化されるようになり（新東 1988；町田 1989），1990年代前半には，火山灰考古学による具体的な事例研究を収載した出版物も刊行された（新井（編）1993）。

火山灰考古学という研究分野は，つぎの4つの項目に整理できると考える。

①年代が分かっているテフラを鍵層として，考古資料の年代を推定する研究

②テフラの堆積によって一瞬にして埋没した良好な考古資料の研究

③火山噴火が人類に与えた影響を検討する火山災害史研究

④テフラからなるあるいはテフラを含有する考古資料の産地同定に利用する研究

①のような，テフラを考古資料の年代指標として用いる研究は，先に述べたように，日本考古学では，大正時代の指宿橋牟礼川遺跡における調査事例が最初であり，その後，群馬県や北海道の遺跡において応用されるようになった。このような伝統に基づいて日本国内では，テフラの堆積が良好な地域において，テフラ研究者と考古学者との協力により遺跡の埋没年代が明らかにされてきた。

それと同時に，②のような，短時間に覆ったテフラによって，遺構・遺物がそのままの状態で保存された集落跡や古墳などの発掘調査と研究が進められてきた。浅間山や榛名山の噴出物に覆われた群馬県内の発掘調査は先駆的なものであり，数多くの事例や多数の研究が蓄積されている（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013）。テフラによってパックされた，通常の遺跡では得られないような格段に情報量の多い調査事例は，当時の集落の景観，住居をはじめとする施設の具体的な構造，生産地の形態，人間の姿，そこから見えてくる社会構造などに肉薄できる。

③については，すでに大正時代の指宿橋牟礼川遺跡の発掘調査報告書中において，濱田耕作が展望していたように，日本考古学においては編年研究にとどまらず，火山災害史研究へと積極的な展開が図られた。災害史研究の一領域としての火山災害考古学の研究からは，テフラ堆積前後の遺跡，遺構と遺物の比較を通じて，列島各地で各時代におけるさまざまなパターンの社会対応を読み取ることができる（菜畑（編）2019；菜畑（編）2024）。

3．南九州における火山災害考古学の進展と指宿橋牟礼川遺跡

南九州には，フィリピン海プレートがユーラシアプレートに沈み込む南海トラフ・南西諸島（琉球）海溝に並行して火山フロントを形成する火山群が連なり，北から霧島火山群周辺，姶良カルデラ周辺，阿多カルデラ周辺，鬼界カルデラ周辺といったいくつかの火山のまとまりが飛び石状に分布している。このような条件によって遺跡において地層として認識できるテフラが多数分布している地域であるとともに，災害をもたらすそれらの脅威に常にさらされてきた土地柄ということができる。南九州の遺跡において肉眼で地層として認識され，考古学的に指標となりうるテフラは，大きく2つに分類される。

第1は，南九州にとどまらず日本列島に広域に分布するテフラを供給した破局的噴火による堆積物であり，その発生頻度は1万年に1回程度と低いものの，このようなテフラは人類文化やその環境に大きな影響を与えるとともに編年研究にとって広域的な時間軸を提供している。過去3万年の間には，火山爆発指数（VEI）7，噴火マグニチュード8台に位置づけられる姶良カルデラや鬼界カルデラから噴出したいずれも先史時代のテフラがあり，前者が旧石器時代，後者が縄文時代の所産である。

第2は，破局的な第1のテフラ発生の長い間隙の間に起こった噴火による堆積物である。この種のテフラの分布は第1のそれに比べれば狭くローカルなものであるが，噴火の頻度は数千年から数百年に1度と比較的高い。火山爆発指数（VEI）は4～6，噴火マグニチュード5台とされ，第1のテフラの規模の10分の1～1000分の1である。事例については，霧島火山群，桜島火山，池田湖，開聞岳火山などを噴出源とする多くのテフラがある。

南九州の自然環境は，前者のカルデラ噴火による深刻な破壊とそこからの再生を繰り返してきた（井村2016）とともに，その破局的噴火の長い間隙の間に起こった後者の噴火活動による局所的な環境擾乱に翻弄されながら今に引き継がれてきているということができる。そういった厳しい環境の中においても人々の生活の証である遺跡は各所で見つかっている。そもそも破局的噴火による激甚な災害が生じた際に人類は生存可能だったのだろうか。もし不毛の地と化した場合，食料を確保し生活できる環境が整うまでどのくらいの時間がかかったのかなど問いは尽きない。なお，文字による記録のない時代の状況については，考古学的なアプローチによって推定するほかないが，歴史時代の噴火災害についても，近代科学による観測や分析の成果と対比できるような詳細な同時代史料が残されている江戸時代以降の事例を除くと，その年代や実態に関しては検討の余地を残しているケースが多い。

南九州における火山災害の考古学的研究については，1980年代以降，先に述べた第1のテフラを噴出した鬼界カルデラや姶良カルデラの巨大噴火による人類への影響ついての議論が進展した[2]。それとともに第2のテフラに関しても，長い噴火史を有する桜島火山の縄文時代と中世の噴火による影響について検討されており[3]，霧島火山群についても，縄文時代や江戸時代の事例研究が進められている[4]。

指宿地方においては，成尾英仁によって整理された開聞岳火山を噴出源とする縄文時代から平安時代の4つのテフラ[5]のうち，飛鳥時代の「青コラ」と平安時代の「紫コラ」という二つの開聞岳テフラによる火山災害遺跡として，指宿橋牟礼川遺跡を対象とした学際的な調査研究（永山1996；成

尾・下山 1996；成尾ほか 1997；下山 2002）が精力的に進められた。さらに同じ市内に所在する敷領遺跡においては，「紫コラ」で覆われた平安時代の集落跡や水田跡の学術研究プロジェクトによる発掘調査が継続的に実施され，噴火当時の景観復元や災害の実態解明が行われている（鎌田ほか 2009；鷹野（編）2010；渡部ほか 2013；中摩ほか 2016；松﨑 2024；松﨑・西牟田 2024）。一つの地点における孤立した情報だけでなく，他の地点における情報との総合的な比較検討を経て，災害の全体像を復元するという災害史研究の理想的な実践が取り組まれている。なによりも，指宿橋牟礼川遺跡をはじめとする，火山噴火によって罹災した集落や耕作地とその周辺の環境が当時のままパックされた状態で発見されるという事例は，全国的にみても希少なケースである[6]。こういった一連の調査研究の蓄積が進められている指宿市域は，西日本における火山災害考古学の研究拠点であるといっても過言ではない。

4．おわりに

指宿市は火山灰考古学の発祥の地であり，いわゆる聖地と言っていいかもしれない。旧石器時代から平安時代にかけての多数のテフラがあり，人類がどのように向き合ってきたかを知ることができる格好のフィールドである。この地では，これまでの関係者の不断の努力によって，鹿児島県内の自治体の中でも抜きん出て遺跡の調査研究と検証が取り組まれ，その保存と活用も進められてきた。歴史遺産を未来へ継承していく環境が整えられている地域である。その核となる場所が指宿橋牟礼川遺跡であり，指宿市考古博物館時遊館 COCCO はしむれだろう。これからも火山灰考古学という言葉をキーワードにしながら，ワクワク，ドキドキするようなエキサイティングな研究や多様な展開を期待している。

注

1）テフラ（tephra）とは，火山が噴火した際に火口から放出され，降下したり流下したりして地表に堆積した火山砕屑物の総称。ギリシャ語で灰のこと。広義の火山灰

2）縄文時代早期末に起こった鬼界カルデラの噴火（鬼界アカホヤ噴火）については，1980 年代後半から 2000 年代初頭にかけて，九州規模で土器様式が断絶した（新東 1980 ほか）のか存続した（河口 1985 ほか）のかという論争が起こった。その後，筆者は，後者の説を支持するともに噴火後の狩猟採集社会の様相について検討している（桒畑 2016a）。後期旧石器時代の最終氷期最寒冷期直前に起こった姶良カルデラの噴火による人類への影響に関しても，積極的な議論が続けられている（藤木 2019；松本 2023 など）。

3）桜島火山については，縄文時代草創期の噴火の影響についての考察（新東 1997），縄文時代早期後葉の噴火と遺跡の動態に関する研究（桒畑 2014），15 世紀後半の噴火による耕作地への影響と復旧についての研究（桒畑 2016b；桒畑・高橋 2019）などがある。

4）霧島火山群については，縄文時代中期の御池噴火による狩猟採集民への影響（桒畑 2015）や江戸時代の霧島火山新燃岳噴火による耕作地への影響と復旧について検討されている（桒畑 2016）。

5）成尾英仁は，開聞岳火山起源の「コラ」と呼ばれるテフラについて，下位から，縄文時代の黄コラ，弥生時代の暗紫コラ，古墳時代の青コラ，平安時代の紫コラの 4 つを示した（成尾 1984）。その後，開聞岳火山を起源とするテフラは，全体で 12 層が識別されている（藤野・小林 1997）

6）日本国内において，集落や耕作地などの当時の人々の生活に関わる全てのものが封印された状態で把握できる火山噴火罹災遺跡が確認されている地域として，北海道南部，東北地方北部，富士山周辺，群馬県などがある。

参考文献

新井房夫（編） 1993『火山灰考古学』 古今書院　264 頁
井村隆介　2016「南九州の巨大噴火と環境変化」『日本生態学会誌』66　pp.707-714
鎌田洋昭・中摩浩太郎・渡部徹也　2009『日本の遺跡 40　橋牟礼川遺跡』同成社　184 頁

河口貞徳　1985「塞ノ神式土器と轟式土器」『鹿児島考古』19　pp.1-34
桒畑光博　2009「考古資料からみた桜島 11 テフラの噴出時期と影響」『南の縄文・地域文化論考（新東晃一代表還暦記念論文集）』上巻　南九州縄文研究会　pp.97-110
桒畑光博　2015「霧島火山群の主要テフラと考古学への応用」『月刊地球』37（6）　pp.246-251
桒畑光博　2016a『超巨大噴火が人類に与えた影響 - 西南日本で起こった鬼界アカホヤ噴火を中心として -』雄山閣　255 頁
桒畑光博　2016b「火山災害と復旧 － 桜島火山と霧島火山の事例 － 」第 64 回埋蔵文化財研究集会事務局（編）『災害と復興の考古学 － 発掘現場からの発信 － 発表要旨』 pp.47-56
桒畑光博（編）　2019「特集　火山災害考古学の展開」『季刊考古学』146　雄山閣　pp.13-90
桒畑光博（編）　2024『列島の人々は火山災害にどのように向き合ってきたのか - 火山災害考古学から今を考える -』（五味文彦監修）山川出版社　247 頁
桒畑光博・斎橋浩子　2019「中世の桜島火山噴火による田畠の災害と復旧」『季刊考古学』146　pp.75 -78 雄山閣
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（編）　2013『自然災害と考古学：災害・復興をぐんまの遺跡から探る』 上毛新聞社　223 頁
下山覚　2002「火山災害の評価と戦略に関する考古学的アプローチ - 指宿橋牟礼川遺跡の事例から -」『第四紀研究』41（4）　pp.279-286
新東晃一　1980「火山灰から見た南九州縄文早・前期土器の様相」鏡山先生古稀記念論文集刊行会（編）『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』pp.11-23.
新東晃一　1988「薩摩・大隅の縄文時代 - 火山灰考古学の提唱 -」『毎日グラフ別冊　古代史を歩く』12　日向・薩摩　毎日新聞社　pp.102-105
新東晃一　1997「薩摩火山灰と縄文草創期文化の動態」『人類史研究』9　pp.95-103
鹿野光行（編）　2010『火山で埋もれた都市とムラ - ヴェスヴィオ・浅間・ムラビ・開聞岳 -』　同成社　98 頁
永山修一　1996「文献から見る平安時代の開聞岳噴火」『名古屋大学加速器分析計業績報告書』Ⅶ　pp.31-38　名古屋大学年代測定資料研究センター
中摩浩太郎・鎌田洋昭・惠島瑛子　2016『橫牟礼川遺跡総括報告書』（指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第 56 集）指宿市教育委員会　216 頁
長崎潤一　2006「火山灰考古学」『現代考古学事典（縮刷版）』　同成社　pp.49-52
成尾英仁　1984「開聞岳古小噴出物と遺物の関係：特に初期噴出物の関係について」『鹿児島考古』18　pp.193-215
成尾英仁・下山覚　1996「開聞岳の噴火災害 － 橫牟礼川遺跡を中心に -」『名古屋大学加速器分析計業績報告書』Ⅶ　名古屋大学年代測定資料研究センター　pp.60-69
成尾英仁・永山修一・下山覚　1997「開聞岳古墳時代噴火と平安時代噴火による災害 － 遺跡発掘と史料からの検討 － 」『月刊地球』19（4）　海洋出版　pp.215-222
濱田耕作　1921「薩摩国指宿郡指宿村土器包含層調査報告」『京都帝国大学文学部考古学研究室報告』6　pp.29-48
濱田耕作　1922『通論考古学』大鐙閣　230 頁
藤木聡　2019「姶良カルデラの大噴火と人々」『季刊考古学』146　雄山閣　pp.22-25
藤野直樹・小林哲夫　1997「開聞岳火山の噴火史」『火山』42（3）　pp.196-211
町田洋　1989「火山灰考古学の最近の成果」『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』　クバプロ　pp.46-60
松崎大嗣　2024「開聞岳火山災害と対応の実態」五味文彦（監修）・桒畑光博（編）『列島の人々は火山災害にどのように向き合ってきたのか - 火山災害考古学から今を考える -』 山川出版社　pp.136-152
松崎大嗣・西牟田瑛子　2024『指宿橫牟礼川遺跡国指定 100 年 - 日本の歴史を変えた先史時代のポンペイ -』（令和 6 年度企画展図録）指宿市考古博物館　時遊館 COCCO はしむれ　78 頁
松本茂　2023「姶良火山噴火後の九州における石器群の再編と展開 -AT・A-ito 直上石器群の再検討 -」『旧石器考古学』87　pp.1-20
渡部徹也・鎌田洋昭・鹿野光行・新田栄治　2013「遺跡にみる貞観 16 年の開聞岳噴火災害について」『条里制・古代都市研究』28　pp.1-10　条里制・古代都市研究会

COCCO
HASHIMUREGAWA

COCCO
HASHIMUREGAWA

人物相関図

※所属は大正 5～8 年当時のもの

折田 盛健
（学生時代の姓は西牟田）
指宿出身で旧制志布志中学校へ進学した学生

「橋牟礼川で縄文土器と弥生土器を拾いました！」（※呼称はカイヅカ氏と推定）

土器を見せる

瀬之口 傳九郎
旧制志布志中学校教諭

不思議なことに同じ場所で二種類の土器が見つかりました

情報提供

喜田 貞吉
文部省勤務後，京都帝国大学専任講師

弥生土器と縄文土器とは使う民族が違うのかもしれないと考えました

指宿橋牟礼川遺跡の発掘調査を依頼

情報提供

指宿橋牟礼川遺跡の発掘調査の結果の下層が縄文土器の層から出土しました。

縄文土器と弥生土器は民族の違いではなく土器の違いだけだった時代の違いです！

長谷部 言人
東北帝国大学医学部助教授

共同研究

濱田 耕作
京都帝国大学教授

発掘調査を行ったところ縄文土器が同じ層で弥生土器と混在している状況でした

山崎 五十麿
鹿児島の考古学者

フィルムコミック

日本の歴史を変えた「先史時代のポンペイ」指宿橋牟礼川遺跡

編集：指宿市考古博物館　時遊館 COCCO はしむれ

このマンガは，指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれで平成８年の開館以来上映している「ひらけ！大地のタイムカプセル～橋牟礼川遺跡物語～」の映像を基に，近年の調査成果を加えて再編成したものです。

折田（おりた） 盛健（せいけん）

柳田國男にも認められた研究熱心な学生

明治 31 年 (1898) 指宿市生まれ。学生時代の姓は「西牟田」。旧制志布志中学校に進学。その後，長崎医学専門学校に進学し，医師の道を志す。大正 10 年 (1921) に折田家へ養子縁組し，大正 11 年 (1922)，24 歳の若さで病死。

折田盛健は、歴史や民俗を研究し、日本民俗学の父、柳田國男が出版する雑誌「郷土研究」に研究成果を投稿していたそうです。土器を拾ったのは偶然ではなく、遺跡を探していたのかもしれません。

大正５年 (1916) 夏
指宿　橋牟礼川

指宿市の丈六集落から海に注ぐ小さな川「橋牟礼川」沿いを歩く少年が、露頭の土器を拾いました。
これこそが、指宿橋牟礼川遺跡発見の第一歩だったのです。

瀬之口傳九郎（せのくちでんくろう）

宮崎県の文化財調査に尽力した研究者

明治９年（1876），宮崎県北諸県郡山田町生まれ。後に宮崎県史蹟主事などの役職も勤めた歴史研究者。宮崎県の文化財調査・保存に尽力。鹿児島県においても大隅地域の地下式横穴墓や板碑などを研究。

現在では、「縄文土器が古く弥生土器が新しい」ということは、教科書にも載っている常識であり、同じ遺跡から出土することもよくありますが、当時はまだ定説ではなかったのです。

旧制志布志中学校（現 志布志高等学校）

こちらが、生徒が拾った土器です。

これは奇態な…私の知り合いに山崎五十麿という考古学者がいる。彼に詳しく調べてもらおう。

土器の違いは使っていた民族の違いと考えているが、もしかしたら私の説は間違っているのかもしれんぞ…

それも仕方ある まい。歴史の常識は常に変わっていくものだ…

大正6年 (1917) 6月
旧制志布志中学校

東北大学史料館所蔵

喜田 貞吉（きた ていきち さだきち）

古代史研究の進展に寄与した歴史学者

明治4年 (1871) 徳島県生まれ。明治 29 年 (1896) 京都帝国大学を卒業。明治 34 年 (1901) 文部省に入省後、京都帝国大学教授、東北帝国大学講師などを歴任。歴史学・民族学・歴史地理学を幅広く活用した研究を行った。

明治から大正にかけての学者たちの最大の関心は「日本人の起源」でした。

喜田博士は神話を拠り所とし、土器の違いを民族の違いと捉え、縄文土器はアイヌや蝦夷ら「東方民族」、弥生土器は倭人や熊襲・隼人ら「西方民族」が使用した土器であり、元々日本列島に住んでいた両民族を、現在の日本人の祖先「天孫民族」が征服したとする説を唱えていました。

喜田先生、信じられんでしょうが…

アイヌ式土器（縄文土器）が古く、弥生式土器が新しい。つまり土器の違いは民族の違いではなく、使っていた時代の違いと、私は考えるわけであります。

濱田 耕作（はまだ こうさく）

日本考古学の父

明治 14 年 (1881) 大阪府岸和田生まれ。東京帝国大学で美術史を専攻。大正 2 年から大正 5 年までヨーロッパ留学を経験し、型式学などの研究方法を学ぶ。帰国した年に、京都帝国大学で日本で初めての考古学講座を開き「日本考古学の父」とも呼ばれる。教授を経て京都帝国大学総長。昭和 13 年 (1938) 没。

喜田貞吉が『古事記』や『日本書紀』を根拠にしたのに対し、濱田耕作は、ヨーロッパで学んだ考古学の科学的な方法に基づき、発掘調査や出土遺物の検討を行いました。「日本人がどのように形成されたか」を巡り、二人は論争を繰り広げたのです。

一方、京都帝国大学で講説しているこの考古学者は、喜田貞吉とは違う考えを持っているようです。

私はヨーロッパに留学して、考古学的な研究法を学びましたが、同じ地点から異なる土器が出るからといって、

元々住んでいた民族が別の民族に征服されたという考えはヨーロッパにはありません。同じ民族が、時代を経るごとに異なる土器を作るようになったと考えるべきなのです。

・・・。

・・・。

濱田君。君と同じように、私も自分の説が正しいと思っている。しかし、私は正々堂々といきたい。

これを、読んでみたまえ。

考古学雑誌第８巻第７号

この雑誌には、喜田貞吉が山崎五十麿に頼んでいた、指宿橋牟礼川遺跡の発掘調査の結果が載っていました。

もっと決定的な事実がないと、喜田博士の説を逆転することはできません。

だが、我々は間違っていないはずだ。

濱田さん、やはり新しい説を理解してもらうにはもっと研究が必要ですね。

喜田博士！

長谷部言人（はせべことんど）

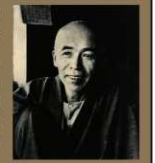
日本人類学に大きな足跡を残した学者

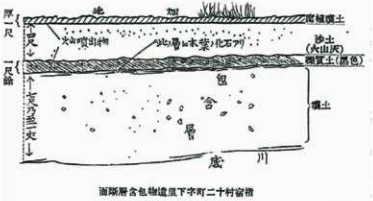
明治 15 年 (1882) 東京都生まれ。東北帝国大学医学部教授，東京帝国大学理学部教授などを歴任。多くの発掘調査を実施し人骨研究を進め，人類学の立場から日本人の起源を研究。鹿児島県出水市所在の出水貝塚の発掘も行う。

山崎五十麿（やまさきいそまろ）

鹿児島県考古学の父

明治 20 年 (1887) 鹿児島市生まれ。鹿児島県専売局に勤めながら，県内各地の発掘調査や考古学研究に力を注いだ人物。指宿橋牟礼川遺跡を最初に発掘・報告し、のちの濱田耕作らの発掘調査を誘引。





薩隅層含包物遺蹟下字町二十村宿橋

薩摩下字町二十村宿橋

山崎五十麿 1918「アイヌ式彌生式及石器等を包含する遺跡」『考古学雑誌』第８巻第７号

山崎五十麿の調査では、「縄文土器と弥生土器などが混出して上下の区別なし」と報告されており、縄文土器と弥生土器を層位的に区別することはできなかったようです。

しかし、縄文土器と弥生土器が同じ地点から出土した事実は、喜田貞吉の説には不利に、濱田耕作の説には有利になるものでした。

大正７・８年の指宿橋牟礼川遺跡の発掘調査（京都大学所蔵）
濱田耕作 1921『薩摩國揖宿郡指宿村土器包含層調査報告』『京都帝國大学文学部考古学研究報告』第６冊より転載

大正８年 (1919) 4月

濱田耕作が初めて指宿橋牟礼川遺跡を訪れたのは大正7年（1918）1月。わずか半日の調査でしたが、指宿橋牟礼川遺跡は、土器の違いは民族ではなく時代の違いという自身の説を確実にする遺跡だと確信し、翌年、山崎五十麿や長谷部言人らと発掘調査を行いました。

発掘調査の結果、開聞岳の火山灰層を挟んで上の地層から弥生土器、下の地層から縄文土器が出土しました。二種類の土器を時代の差と考えた濱田耕作の説が正しいと証明されたのです。

弥生土器の製作者は、縄文時代の子孫であって、土器の形や模様は違えど、決して別の民族の使った土器と考えるべきではないでしょう。

やはり縄文土器が古く弥生土器が新しい。時代を経るにつれ、土器も変化したのだ。

それに、この遺跡は火山灰中や泥流に没した「先史時代のポンペイ」とも名付くべき面白い遺跡だ。ポンペイのように、人々の平和な生活は噴火により破局を迎え、船を出し対岸の大隅に逃げようとした者もいたかもしれない。

ポンペイとヴェスヴィオ山。ポンペイは西暦 79 年の噴火により火砕流で埋没。

濱田耕作による地層図と大正７・８年調査出土土器

濱田耕作 2015『通論考古学（新装第二版）』雄山閣　より転載

弥生土器 現在では，古墳時代に使われた「成川式土器」であることが判明

縄文土器 上段：指宿式土器
下段：市来式土器

▲出土した土器：京都大学総合博物館所蔵
指宿市教育委員会撮影

そして大正十三年（一九二四）十二月九日、「指宿橋牟礼川遺跡」は「指宿橋牟礼川遺物包含地」として国史跡に指定され、現地で遺跡を保存することが決まったのです。

濱田耕作は大正十一年に考古学の入門書「通論考古学」を著します。考古学という学問の基礎を築き上げ、「日本考古学の父」と呼ばれることとなりました。

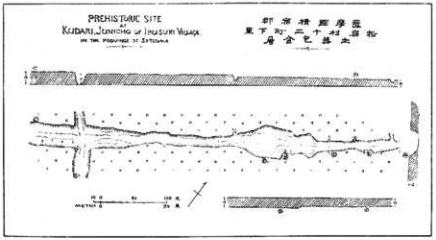
▲昭和 23 年発行版

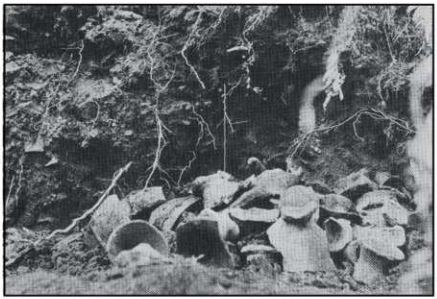
大正時代の橋牟礼川
（京都大学所蔵）

現在の橋牟礼川と国指定史跡公園

指宿橋牟礼川遺跡発見のきっかけを作った折田盛健は、国史跡となった指宿橋牟礼川遺跡を見ることなく、大正十一年、その才を惜しまれながら若くして亡くなります。しかし、指宿橋牟礼川遺跡の発見物語は、博物館を訪れる子どもたちへと語り継がれ、一人の学生が日本の歴史を変えるきっかけを作ったという事実は、遺跡をより身近なものに感じさせてくれます。

折田盛健の功績は、百年経っても色褪せることはありません。





濱田耕作の発掘調査図面（上）出土した土器（下）（京都大学所蔵）

濱田耕作 1921「薩摩國揖宿郡指宿村土器包含層調査報告」『京都帝國大学文学部考古学研究報告』第６冊より転載

その後の指宿橋牟礼川遺跡はというと、長らく調査が行われることはありませんでした。

昭和初期の指宿橋牟礼川遺跡（馬渡写真館所蔵）

しかし、昭和五十年代、指宿橋牟礼川遺跡の周辺の畑地を整備し、住宅地や幹線道路をつくる計画が上がったため、道路や下水道の工事範囲において、大規模な発掘調査が行われることになったのです。

土器捨て場の発掘の様子

発掘調査中の一コマ

調査を進めると、地表面から一メートルほどの深さで、「紫コラ」と呼ばれる開聞岳の火山噴出物層が現れ、その真下から、噴火によって埋もれた建物や畠の跡などが発見されました。

火山噴火で埋もれた畠の畝跡

土石流の痕跡

火山灰にパックされたシダ植物のスタンプ

火山灰で埋もれた貝塚

当時の人々の生活の様子が残されている様子はまるでタイムカプセルのよう。

濱田耕作博士が予見した**「先史時代のポンペイ」**が実際に姿を現したのです。

そして、歴史学・火山学・考古学の研究者が協力して調査を進めた結果、「紫コラ」は『日本三代実録』に記された、平安時代の貞観16年3月4日（西暦874年3月25日）に起きた、開聞岳噴火の噴出物であることが明らかになりました。

遺跡で見つかった災害の様子と文献の記述とが一致したのです。

『日本三代実録』
貞観十六年
七月二日条
七月二十九日条

大宰府が次のように報告してきた。

薩摩国従四位上開聞の神が鎮座する山の頂きに、火があり真っ赤に焼けた。噴煙は天を覆い、灰や砂が雨のように降った。

三月四日の夜、雷鳴がとどろき、夜中振動した。明け方になっても空には光がささず、昼間も夜のように暗かった。

細かい砂粒が降ってきた。色は墨のように真っ黒で一日中止まなかった。

※『日本三代実録』：平安時代に書かれた書。菅原道真などが編纂に携わった。

日が暮れるころには、砂粒にかわって雨が降ってきた。雨に濡れた穀物は全て枯れてしまった。河の水は砂粒を大量に含んで黒く濁った。

無数の魚や亀が死んだ。その死んだ魚を食べた者がおり、ある者は死に、ある者は病気になった。

噴火の音や地ひびきは、百里以上離れたところでも聞こえ、社の近くの人々は恐怖のあまり肝をつぶした。なぜこのようなことが起こったのか占ってみると、

「神が封戸（神社の財源を納める戸）を求めている。神社がけがされている。よってこのようなたたりをなした。」という結果がでた。

そこで天皇は、勅（命令）を出して封戸二十戸を開聞神に奉ることを命じた。

学問の分野を超えた共同研究により、噴火の具体的な様子や、災害の実態が、次第に明らかになっていきました。

その一つが、「倒壊建物跡」。火山灰で埋もれた建物の存在は、噴火当時の人々の生活の状況を示すものであり、火山災害遺跡であることを決定づける証拠となりました。

①西暦８７４年３月２５日夜。噴火の時まで建物は建っていた。

②最初に火山レキ、
次に火山灰が降り積もる。

③雨も降ってきた。水分を多く含んだ火山灰は重くなる。

④重さに耐えられなくなった建物は斜めに崩れた。
細かい火山灰が雨水といっしょに建物に侵入。

紫コラにより倒壊した建物と埋没プロセス

こうして
指宿橋牟礼川遺跡は…

⑤時間が経ち、木材は腐って空洞の穴だけが残った。

「縄文土器が弥生土器より古い時代のものであることを、火山灰層によって日本で初めて証明した遺跡」としての重要性に加えて、

＋

「噴火の日にちや時間帯までもがわかる、国内でも貴重な火山災害遺跡」としての価値をも有する遺跡であることが明らかになったのです。

畠（はたけ）

幅２メートルの道を挟んで両側に，畠地が広がっています。畝の幅は 60～１メートル程度。７条～９条で一単位をなすようです。イネやキビなどのプラントオパール（植物の葉の表皮細胞に作られた小さなガラス質の石）が検出され，陸稲や雑穀を栽培していたと考えられます。

掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）

人々は地面に掘った穴に柱を建てた，掘立柱建物に住んでいました。そのほか，道沿いには，倉庫と考えられる高床の建物もあります。

災害の時代　９世紀

日本史上，災害の世紀とも言えるのが，９世紀です。指宿橋牟礼川遺跡が火山噴火によって被害を受けたのと同じ貞観年間に起こった災害としては，東北の陸奥国における巨大地震と津波がよく知られています。また，富士山噴火をはじめ，全国的に火山活動が盛んな時期でもありました。

遺跡から過去の災害と復興の様子を知り，防災に活かす上でも，火山災害遺跡の研究は，現代の私たちにとって重要なのです。

平安時代のムラ

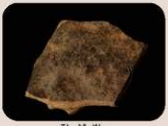
開聞岳噴火により埋没する直前のムラの様子です。

貝塚

貝などが直径７ｍほどの範囲に捨てられた貝塚が，紫コラにパックされていました。

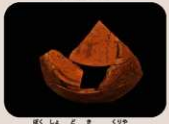
平安時代の「役所」跡？

紫コラで埋没した頃の指宿橋牟礼川遺跡は，建物は少なく畠が広がる景観でした。しかし，紫コラと青コラの間の層からは，官衙（古代の役所）があった可能性を示す遺物が数点出土しています。大型の建物等は見つかっていませんが，幅６ｍの道や柵列と思われる杭列，ここで紹介する遺物の存在から，平安時代のある時期，何らかの公的な施設が置かれていた可能性が考えられており，指宿郡衙の推定地にもなっています。



転用硯

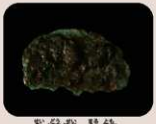
平安時代の役人たちは，さまざまな記録を，紙や木簡と呼ばれる板に墨で書いていました。指宿橋牟礼川遺跡では，碗の蓋を硯にして墨をすった硯が見つかっています。当時文字を読み書きできたのは，貴族や役人，僧侶などごく限られた人であり，筆記用具が出土する遺跡は，官衙が存在した可能性が考えられるのです。



墨書土器「厨」

「厨」は大勢で酒食を供にする施設を意味します。官衙では身分の高い役人が来た際にその地でもてなしが行われていたようです。「厨」の墨書土器が出土する遺跡は，官衙であった可能性や，宮道沿いの場所であったと考えられています。

「真」



青銅製 丸鞆

青銅製 巡方

古代の役人の帯（復元）

平安時代の役人の帯金具です。皮製の帯につけたもので，身分によって，素材や大きさが違いました。丸鞆の表面には，わずかに金メッキの跡が残っており，身分の高い役人の持ち物だったと考えられます。

奈良～平安時代

さらに掘り進めていくと、奈良時代～平安時代の地層や、七世紀後半の開聞岳噴火による火山噴出物（青コラ）が見つかりました。

橋牟礼川遺跡の地層

指宿橋牟礼川遺跡に住んだ古代の人々は、二度にわたり火山災害を経験していたのです。飛鳥時代の噴火の際は、大きな被害はなく、早期復旧した痕跡があり、この地で生活を続けられたようです。

飛鳥時代

青コラと須恵器長頸壺

青コラの直下から，近畿地方産の須恵器長頸壺が見つかりました。周囲の堆積状況から，壺は噴火当初は地面に立てられており，その後噴火に伴う土石流に飲み込まれてしまったとわかりました。貴重品を用いて，噴火という危機を鎮める地鎮の目的があったのではとも考えられています。

古墳時代のムラ

多数の古墳時代の竪穴式建物やおびただしい数の土器が見つかりました。古墳時代の橋牟礼川遺跡は，九州南部の中でも，大規模な集落だったのです。

子持勾玉

腹や背に小さな勾玉が飾られたものです。呪力を持つと考えられており，祭祀に用いられました。県内唯一の出土例です。

竪穴建物跡

古墳時代の竪穴式建物が，道路部分だけの調査にも関わらず，重なり合って 150 軒も見つかりました。この地に，長期にわたり人々が住み続けていたことがわかります。

さらに下層へと掘り進めると、青コラの下から、九州南部を代表する古墳時代の大集落が発見されたのです。

土器捨て場

大量の土器を捨てた場所が見つかりました。これは，鹿児島湾に面した古墳時代から飛鳥時代の集落で見られる特徴です。なぜ大量廃棄を行ったのか，理由はよくわかっていません。

成川式土器

生活道具である土器が大量に出土しました。脚がつく甕や，赤く塗った高杯，胴に巡る突帯（粘土紐）が特徴です。

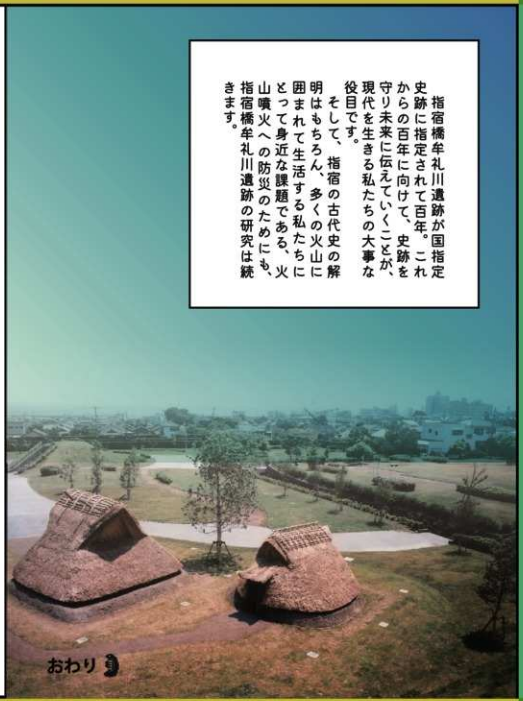
若い馬の骨

馬厩（ばきゅう）の可能性のある細い溝跡も見つかっており，農耕のため飼育されていたのかもしれません。

指宿橋牟礼川遺跡に立つ濱田耕作

指宿橋牟礼川遺跡が国指定史跡に指定されて百年。これからの百年に向けて、史跡を守り未来に伝えていくことが、現代を生きる私たちの大事な役目です。

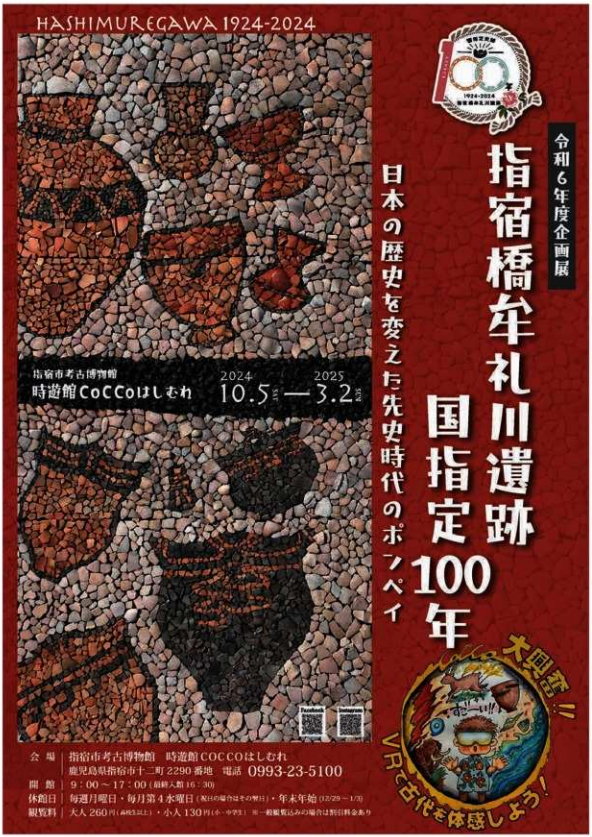
そして、指宿の古代史の解明はもちろん、多くの火山に囲まれて生活する私たちにとって身近な課題である、火山噴火への防災のためにも、指宿橋牟礼川遺跡の研究は続きます。



もっと詳しく知りたい方へ

時遊館 COCCO はしむれで 企画展開催中！

展示図録も好評発売中です！



指宿橋牟礼川遺跡国史跡指定 100 年事業

上野原縄文の森秋まつりブース出店
（令和５年 11 月）

石器売りのおじさん（古代人が売りにきた子持勾玉や石器を拾ったどんぐりと交換するイベント）を同会場で実施

史跡公園を活用したはしむれ古代マルシェ
（令和６年５月）

火おこし選手権（令和６年５月５日）

出土遺物モチーフにしたオリジナルアロハシャツ製作

市民のためのいぶ好き「ふるさと学」講座
第１回：6/15「世界の火山噴火災害と開聞岳噴火」
新田 栄治先生（鹿児島大学名誉教授）
第２回：8/3「隼人と橋牟礼川遺跡」
永山 修一先生（ラ・サール学園教諭）
第３回：10/19「橋牟礼川遺跡の発掘調査と時遊館COCCOはしむれの設立」
上村 俊雄 先生（鹿児島大学名誉教授）
第４回：12/19「古代の「食」を探る－古墳時代の植物利用－」
大西 智和 先生（鹿児島国際大学教授）
第５回：1 /18 「開聞岳の噴火と橋牟礼川遺跡」
成尾 英仁 先生（鹿児島大学非常勤講師）

古代服ユニチャーム

地層風キャンディーレジンキーホルダー

ミニチュア古代食プレートマグネット

子持勾玉入ハーバリウム

地層風スライム

勾玉入ミニチュアフラッペ

古代をテーマにしたものづくり体験（月間体験・イベント限定体験）

指宿温泉祭ハンヤ踊り　古代人に仮装し PR（令和６年９月）

令和６年度企画展「指宿橋牟礼川遺跡国指定 100 年 ～日本の歴史を変えた先史時代のポンペイ～」開催

遺跡の発見から指定までの歴史を紹介

土器捨て場を再現した展示コーナー

三次元データを用いた VR 古代体験
（協力：株式会社パスコ）

第９回沖縄考古学会・鹿児島県考古学会の指宿市での開催（共催）
令和６年 10 月 26 日（土）・27 日（日）
テーマ：「近世における薩摩・奄美・琉球」

指宿市の文化財に関する研究発表

「枚聞神社宝物の基礎調査と山川港周辺の文化財」　「山川石の考古学ー薩南諸島における山川石製墓石の流通ー」

会場の様子

旧正龍寺跡墓石群見学

国指定史跡　今和泉島津家墓所
（鹿児島島津家墓所）見学

枚聞神社宝物殿にて

指宿橋牟礼川遺跡国史跡指定100年シンポジウム
日本の歴史を変えた先史時代のポンペイ

編集・発行　指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれ
住　　所　〒891-0403　鹿児島県指宿市十二町2290番地
電　　話　0993-23-5100
F　A　X　0993-23-5000
H　　P　https://www.city.ibusuki.lg.jp/cocco/
発行年月日　令和6年（2024）11月24日
印　　刷　株式会社 指宿新生社印刷

COCCO
HASHIMUREGAWA